

平成 30 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

日本の高校生のスポーツ・身体活動促進のパーソナリティ
別アプローチの検討

学籍番号 4117035

氏名 永井 淳悟

研究指導教員 小笠原 悦子

合格年月日 平成 31 年 2 月 18 日

論文審査員 主査

小笠原悦子

副査

工藤 康弘

副査

小笠原悦子

目次

第1章 緒言	1
第1節 研究の背景	1
第2節 研究の必要性	2
第3節 研究の目的	3
第4節 用語の定義	3
第1項 パーソナリティ	3
第2項 スポーツに関する態度スコア	3
第3項 スポーツに関する態度因子	4
第4項 モチベーション	4
第2章 先行研究	5
第1節 イギリスにおける Youth Insight Pack における研究	5
第1項 若者への理解：概要	5
第2項 若者への理解：態度と行動	6
第3項 若者の魅力：新しい層へのアプローチ	9
第2節 Under the Skin における研究	10
第1項 各パーソナリティにおいての項目	10
第2項 Under the Skin における6つのパーソナリティ	12
第3節 日本における若者へのスポーツ促進・アプローチについての取り組み	13
第1項 第2期スポーツ基本計画	13
第2項 平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）	14
第3項 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン	17
第4項 スポーツへの関わりに関する研究動向	19
第5項 日本におけるスポーツ促進についての取り組みのまとめ	21
第4節 日本の若者のスポーツ・身体活動とパーソナリティの分類における研究	22
第1項 Sport England で行われた調査項目の再分析と日本での応用	22
第2項 Sport England で行われた分析方法の再分析と日本での応用	23
第3項 Sport England で行われた調査の日本での応用による結果	24
第5節 高校生のスポーツ実施促進に向けたパーソナリティ分類における研究	24
第1項 高校生のスポーツ促進のパーソナリティ分類研究の結論	25

第6節 質的研究の特性・優位性と実施する意義	25
第1項 質的研究の特性	25
第2項 量的研究と質的研究の比較	26
第3項 質的研究におけるデータの収集方法	27
第4項 質的研究の優位性・意義と方法	28
第7節 GTAにおける特性と優位性	29
第1項 質的研究における分析方法の種類	29
第2項 様々なGTAのバージョン	30
第3項 GTAの特性と強み	31
第4項 GTAを選択する意義	32
第8節 先行研究のまとめ	32
第9節 リサーチクエスション	33
第3章 研究方法	34
第1節 パーソナリティ調査1	34
第1項 調査方法	34
第2項 分析方法	38
第2節 パーソナリティ調査2	42
第1項 インタビュー調査	42
第2項 分析方法	44
第3節 日本の若者へのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチの比較	45
第1項 平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）の比較項目	46
第2項 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインの比較項目	47
第3項 比較方法	48
第4節 倫理的配慮	49
第4章 結果	50
第1節 パーソナリティ調査1 アンケート調査	50
第1項 個人的属性	50
第2項 現在のスポーツ活動について	50
第3項 日常の生活行動について	51
第4項 生活環境について	52

第2節 各尺度の構成概念妥当性の検討	52
第1項 スポーツへの関与に関する項目	52
第2項 態度因子	53
第3項 スポーツへの関与スコアの算出	54
第4項 潜在クラス分析によるクラスタリング	55
第3節 クラスタごとの分析結果	56
第1項 各クラスターの特徴	56
第2項 各クラスター間における態度因子の比較	56
第3項 各クラスター間のスポーツへの関与スコアの比較	60
第4項 「運動・スポーツをすることが好き」「運動スポーツを観ることが好き」 「体育授業が好き」の3項目におけるクラスター間の比較	60
第5項 モチベーションにおけるクラスター間の比較	62
第6項 各クラスターにおける特徴	67
第4節 パーソナリティ調査2 インタビュー調査	73
第1項 パーソナリティ1におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	73
第2項 パーソナリティ2におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	83
第3項 パーソナリティ3におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	93
第4項 パーソナリティ4におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	103
第5項 パーソナリティ5におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	113
第6項 パーソナリティ6におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	123
第7項 パーソナリティ7におけるラベル・カテゴリー生成とカテゴリー関連図、 カテゴリー関連統合図の作成	133
第5節 各クラスターへのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチ方法の検討	144

第1項	パーソナリティ1	144
第2項	パーソナリティ2	150
第3項	パーソナリティ3	156
第4項	パーソナリティ4	162
第5項	パーソナリティ5	168
第6項	パーソナリティ6	174
第7項	パーソナリティ7	180
第6節	日本の若者へのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチの比較	186
第1項	平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）との比較	186
第2項	運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインとの比較	196
第5章	考察	203
第1節	Sport England との比較	203
第1項	Sport Enthusiasts（スポーツ愛好家）	203
第2項	Confident Intellectuals（自信を持った知識人）	203
第3項	Ambitious Self-starters（野心的な自己スターター）	204
第4項	Cautious Introverts（慎重な内向）	205
第5項	Thoughtful Improvers（思いやりのある改良者）	205
第6項	Everyday Youths（ありのままの若者）	206
第7項	日本で強く表れていたパーソナリティの特性	206
第2節	平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）と各パーソナリティの 適正についての考察	207
第1項	「運動」の指導内容との比較についての考察	207
第2項	「思考力、判断力、表現力等」の指導内容との比較についての考察	208
第3項	「学びに向かう力、人間性等」の指導内容との比較についての考察	208
第3節	運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインと各パーソナリティの適 正についての考察	208
第1項	合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容との比較 についての考察	208
第2項	適切な休養日等の設定の内容	209
第3項	生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備	209

第4節 指導要領・ガイドラインとの比較を通しての考察.....	209
第6章 結論	211
第1節 研究の概要.....	211
第2節 研究の限界.....	211
第3節 今後の課題.....	212
第1項 対象者.....	212
第2項 アプローチの実践.....	212
第3項 様々なアプローチとの比較.....	212
引用・参考文献一覧.....	213
Abstract.....	217
添付資料.....	218
1. 質問紙.....	219
2. GTAにおける分析過程一覧表.....	224
▪ パーソナリティ1.....	224
▪ パーソナリティ2.....	248
▪ パーソナリティ3.....	275
▪ パーソナリティ4.....	301
▪ パーソナリティ5.....	341
▪ パーソナリティ6.....	371
▪ パーソナリティ7.....	401

図・表リスト

図1 イギリスの若者の1週間の内に各アクティビティで過ごした時間.....	6
図2 若者のスポーツとの関係についてよく考えられていたこと.....	7
図3 イギリスにおける若者のスポーツに対する態度と行動.....	8
図4 イギリスにおける若者全てに当てはまる経験やメッセージ.....	9
図5 新しい3つの層の特徴とアプローチ.....	10
図6 Under the Skinにおける6つのパーソナリティ.....	12
図7 3つの要素からの6つのパーソナリティへのアプローチの方法.....	13

図 8	分類された7つのクラスターの概要.....	55
図 9	クラスター1の特徴.....	67
図 10	クラスター2の特徴.....	68
図 11	クラスター3の特徴.....	69
図 12	クラスター4の特徴.....	70
図 13	クラスター5の特徴.....	71
図 14	クラスター6の特徴.....	72
図 15	クラスター7の特徴.....	73
図 16	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ1)	74
図 17	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ1)	75
図 18	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ1) ..	76
図 19	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたいか (パーソナリティ1)	77
図 20	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ1)	78
図 21	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ1)	79
図 22	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ1)	80
図 23	家族との関係性はどうか (パーソナリティ1)	81
図 24	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ1)	82
図 25	パーソナリティ1 カテゴリー関連統合図	83
図 26	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ2)	84
図 27	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ2)	85
図 28	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ2) ..	86
図 29	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたいか (パーソナリティ2)	87
図 30	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ2)	88

図 31	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 2)	89
図 32	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 2)	90
図 33	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 2)	91
図 34	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 2)	92
図 35	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 2)	93
図 36	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ 3)	94
図 37	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ 3)	95
図 38	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ 3)	96
図 39	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい (パーソナリティ 3)	97
図 40	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ 3)	98
図 41	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 3)	99
図 42	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 3)	100
図 43	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 3)	101
図 44	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 3)	102
図 45	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 3)	103
図 46	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ 4)	104
図 47	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ 4)	105
図 48	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ 4)	106
図 49	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい (パーソナリティ 4)	107
図 50	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ 4)	108
図 51	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 4)	109

図 52	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 4)	110
図 53	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 4)	111
図 54	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 4)	112
図 55	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 4)	113
図 56	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ 5)	114
図 57	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ 5)	115
図 58	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ 5)	116
図 59	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい (パーソナリティ 5)	117
図 60	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ 5)	118
図 61	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 5)	119
図 62	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 5)	120
図 63	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 5)	121
図 64	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 5)	122
図 65	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 5)	123
図 66	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ 6)	124
図 67	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ 6)	125
図 68	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ 6)	126
図 69	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい (パーソナリティ 6)	127
図 70	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ 6)	128
図 71	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 6)	129
図 72	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 6)	130
図 73	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 6)	131

図 74	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 6)	132
図 75	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 6)	133
図 76	常日頃の時間をどう使うか (パーソナリティ 7)	134
図 77	スポーツや運動 (身体活動) と聞いてどんなイメージをもつか (パーソナリティ 7)	135
図 78	身体活動をしている時、周りの目が気になるか (パーソナリティ 7)	136
図 79	どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい (パーソナリティ 7)	137
図 80	モチベーションが高まる瞬間 (勝負事など) などはあるか (パーソナリティ 7)	138
図 81	心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか (パーソナリティ 7)	139
図 82	何かを決断するときどのように決断するか (パーソナリティ 7)	140
図 83	家族との関係性はどうか (パーソナリティ 7)	141
図 84	自身の活動・行動に人間関係は重要か (パーソナリティ 7)	142
図 85	カテゴリー関連統合図の作成 (パーソナリティ 7)	143
図 86	注意をひきつける (パーソナリティ 1)	145
図 87	期待に応える (パーソナリティ 1)	147
図 88	持続的に戻ってきてもらう (パーソナリティ 1)	149
図 89	注意をひきつける (パーソナリティ 2)	151
図 90	期待に応える (パーソナリティ 2)	153
図 91	持続的に戻ってきてもらう (パーソナリティ 2)	155
図 92	注意をひきつける (パーソナリティ 3)	157
図 93	期待に応える (パーソナリティ 3)	159
図 94	持続的に戻ってきてもらう (パーソナリティ 3)	161
図 95	注意をひきつける (パーソナリティ 4)	163
図 96	期待に応える (パーソナリティ 4)	165
図 97	持続的に戻ってきてもらう (パーソナリティ 4)	167
図 98	注意をひきつける (パーソナリティ 5)	169
図 99	期待に応える (パーソナリティ 5)	171

図 100	持続的に戻ってきてもらう（パーソナリティ5）	173
図 101	注意をひきつける（パーソナリティ6）	175
図 102	期待に応える（パーソナリティ6）	177
図 103	持続的に戻ってきてもらう（パーソナリティ6）	179
図 104	注意をひきつける（パーソナリティ7）	181
図 105	期待に応える（パーソナリティ7）	183
図 106	持続的に戻ってきてもらう（パーソナリティ7）	185
表 1	体づくり運動における「知識」の指導内容	15
表 2	体づくり運動における「運動」の指導内容	15
表 3	体づくり運動における「思考力, 判断力, 表現力等」の指導内容	16
表 4	体づくり運動における「学びに向かう力, 人間性等」の指導内容	17
表 5	合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容	18
表 6	適切な休養日等の設定の内容	18
表 7	生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備の内容	19
表 8	学校単位で参加する大会等の見直しの内容	19
表 9	質的研究におけるデータ収集法	27
表 10	面接における質問の構造	28
表 11	内容分析による手順	29
表 12	現在の運動・スポーツ活動についての項目	35
表 13	日常生活行動についての項目	36
表 14	生活環境についての項目	36
表 15	スポーツへの関与に関する項目	36
表 16	態度因子の項目	37
表 17	スポーツパーソナリティ調査項目への追加項目	38
表 18	人生におけるモチベーションに関する質問項目	38
表 19	スポーツへの関与に関する項目	39
表 20	態度因子の項目	40
表 21	潜在クラス分析に用いた項目	41
表 22	インタビューについての詳細	42

表 23	インタビューにおける質問項目	43
表 24	自由記述における質問項目	44
表 25	「運動」の指導内容の比較項目	46
表 26	「思考力、判断力、表現力等」の指導内容の比較項目	46
表 27	「学ぶに向かう力、人間性等」の指導内容の比較項目	47
表 28	合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容の比較項目	47
表 29	適切な休養日等の設定の内容の比較項目	47
表 30	生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備の内容の比較項目	48
表 31	対象者全体の性別	50
表 32	対象者全体の現在のスポーツ活動	51
表 33	対象者全体の日常生活行動	52
表 34	対象者全体の生活環境	52
表 35	スポーツへの関与に関する 7 項目の探索的因子分析結果 (パターン行列)	53
表 36	「5-4. 健康や体力を意識している」を除いたスポーツへの関与に関する 6 項目の探索的因子分析結果 (因子行列)	53
表 37	態度因子における平均値、標準偏差、信頼性係数	54
表 38	BIC の値	55
表 39	各クラスターにおけるスポーツへの関与スコアの平均値	56
表 40	各クラスターにおける運動頻度および部活動所属状況	56
表 41	各クラスターにおける態度因子の平均値、標準偏差、および MANOVA の 結果	58
表 42	各クラスター間の態度因子の Tukey の結果	59
表 43	スポーツへの関与スコアのクラスター別平均値、標準偏差および ANOVA の 結果	60
表 44	クラスターと関与スコアにおける Tukey の結果	60
表 45	各クラスター間における運動・スポーツの嗜好に関する MANOVA の結果	61
表 46	各クラスター間における運動・スポーツの嗜好に関する Tukey の結果	62

表 47 各クラスターにおけるモチベーション（生活の中で大切にしていること）の χ ² 検定の結果（その 1）	65
表 48 各クラスターにおけるモチベーション（生活の中で大切にしていること）の χ ² 検定の結果（その 2）	66
表 49 「運動」の指導内容との比較（1）	187
表 50 「運動」の指導内容との比較（2）	188
表 51 「思考力、判断力、表現力等」の指導内容：体の動かし方や行い方（1）	190
表 52 「思考力、判断力、表現力等」の指導内容：体の動かし方や行い方（2）	191
表 53 「思考力、判断力、表現力等」の指導内容：運動実施に繋がる感度....	192
表 54 「学びに向かう、人間性等」の指導内容との比較（1）	194
表 55 「学びに向かう、人間性等」の指導内容との比較（2）	195
表 56 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容との比較	197
表 57 適切な休養口等の設定の内容との比較.....	199
表 58 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備との比較（1）	201
表 59 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備との比較（2）	202
表 60 高等学校指導要領 保健体育編・体育編の比較のまとめ	210
表 61 運動部の在り方に関する総合的なガイドラインの比較のまとめ.....	210

第1章 緒言

第1節 研究の背景

スポーツ庁が実施した「平成29年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」³¹⁾によると「運動やスポーツが好き」と答える中学生の割合は、2008年度と比較すると男女とも上がっており、2017年度では「運動やスポーツが好き」と答える男子は62.9%、女子は47.0%と男子は半数以上、女子でも約半数が「運動やスポーツが好き」と答えている。しかし、「運動やスポーツが好き」と答えているグループであっても、実際のスポーツ・身体活動への参加である「放課後や休日に運動やスポーツを行う機会」の割合は「好き」と答えたグループであっても「よくある」が44.2%、「やや好き」のグループでは「よくある」が12.7%まで下落している。

すなわち、「運動やスポーツが好き」と答える割合が上昇したことから、スポーツに対する態度は、ポジティブなものとなったが、そのポジティブな態度が実際にスポーツ・身体活動に繋がっているかというのは定かではなく、スポーツに対する態度と実際のスポーツ・身体活動は一致しないのである。このような結果から、スポーツに対する態度を良くするだけではスポーツ・身体活動を促進するアプローチ方法としては、あまり効果がないのではないかと考える。また、「運動やスポーツが嫌い・やや嫌い」と答えるグループも存在する³¹⁾。スポーツ庁はこのような「運動やスポーツが嫌い・やや嫌い」などの層に対して、「自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生を80%にすること。スポーツが嫌い・やや嫌いである中学生を16.4%から8%まで半減させること」³²⁾としている。これらの層に対して、適切なアプローチをしていくことも重要な課題である。

一方、同じような問題を抱えていたイギリスでは Sports England が“*Youth insights pack*”²⁵⁾と“*Under the skin*”²⁶⁾という若者とスポーツの関係性に関する2つの報告を行った。“*Youth insights pack*”²⁵⁾ではスポーツへの態度を3パターンで、運動頻度を高、中、低の3段階で表した結果、今まで行ってきたスポーツ・身体活動参加への促進は既にスポーツに取り組んでいる人のためのものやスポーツに対してある程度の能力を備えている人への提供が多くなってしまっていたことを示した。そのため、それ以外の層へのアプローチを行うことが重要であるとした。そして、それらの調査結果を踏まえた“*Under the skin*”²⁶⁾ではスポーツへの態度などを含めた、様々な層へアプローチを行うため、スポーツ・身体活動に限らず、生活習慣などの要因を考慮に入れ、若者を6つのパーソナリティに分類した。そして、それぞれのグループ特性、スポーツ・身体活動との関わり方を考

慮し、グループ毎にスポーツ・身体活動の参加、継続を促すための最適なアプローチ方法を明らかにした。さらに、グループごとに“**Attracting their attention**”、“**Deliver against their expectations**”、“**Keep them coming back**”という3つの項目で、スポーツ・身体活動を促進するためのアプローチの方法について言及した。さらに、この2つの報告によってスポーツへの態度と実際のスポーツ・身体活動への参加行動は一致しないことが明らかになった。つまり、スポーツ・身体活動を促進するためにはスポーツへの態度を変化させるだけではなく **Under the Skin**²⁰⁾が明らかにしたアプローチ方法のように実際の参加行動を変化させなければならないのである。

第2節 研究の必要性

日本では「第2期スポーツ基本計画」³⁰⁾において「運動やスポーツが嫌い・やや嫌い」などの層に対して、「自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生を80%にすること。スポーツが嫌い・やや嫌いである中学生を16.4%から8%まで半減させること」と示されたように、「スポーツが好き・嫌い」などのスポーツへの態度にフォーカスし、スポーツへの関わり方を検討することが多い。スポーツへの態度だけを変化させるのではなく、実際のスポーツ・身体活動への参加を変化させるためにも、イギリスの **Sport England** が実施したようにパーソナリティ分類を行い、それぞれのパーソナリティごとに、スポーツ・身体活動の参加、継続を促すための異なったアプローチ方法を導き出すという方法は行われていない。そこで、日本においてもこのアプローチ方法へと導く研究を行うことが必要であると考えられる。

また、それらの導き出したアプローチ方法と現在日本において実施されている若者へのスポーツ・身体活動促進のためのアプローチ方法を比較することも必要であると考えられる。現在日本において実施されている若者へのスポーツ・身体活動促進のためのアプローチ方法には文部科学省¹⁴⁾で推奨されている「平成30年 高等学校学習指導要領(体育・保健体育)」(以下、指導要領)とスポーツ庁³²⁾で推奨されている「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(以下、ガイドライン)がある。指導要領の保健体育科の趣旨として「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健との一層の関連や発達段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。」¹⁴⁾と示されている。つまり、指導要領は教育的な側面を兼ね備えていると同時に学内活動である体育などを通じて若者の生涯にわたっての豊

かなスポーツライフを実現するためのアプローチの側面も兼ね備えている。ガイドライン策定の趣旨としては「生徒がスポーツを楽しむことで運動習慣の確立等を図り、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の育成を図るとともに、バランスのとれた心身の成長と学校生活を送ることができるようにすること」³²⁾と示されている。つまり、ガイドラインは学内活動である運動部活動を通じて若者の運動習慣や生涯にわたっての豊かなスポーツライフを実現するためのアプローチの側面も兼ね備えている。上記の現在の日本の若者へのスポーツ・身体活動促進のためのアプローチ方法である指導要領とガイドラインを本研究で検討するアプローチ方法と比較することで現在の日本において若者のスポーツ・身体活動を促進する際に様々な層へアプローチを実施できているのかを検討することも必要であると考えられる。

第3節 研究の目的

本研究の目的は、高校生のスポーツ・身体活動の参加促進におけるパーソナリティを分類し、分類されたパーソナリティへのアプローチ方法について検討することである。また、分類された各パーソナリティへのアプローチ方法については、先行研究で得られた文部科学省¹⁴⁾で推奨されている「平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）」とスポーツ庁³²⁾で推奨されている「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」との比較・検討を行うことである。

第4節 用語の定義

第1項 パーソナリティ

本研究では、Sport Englandによる”Under the skin”²⁶⁾で用いられた「態度、モチベーション、スポーツとの関わり方および個人的属性」を考慮した修正版スポーツパーソナリティ調査項目を使用した質問紙調査の対象者を潜在クラス分析によってクラスタリングすることで分類されたグループのことをパーソナリティと定義した。

第2項 スポーツに関する態度スコア

本研究では”Under the skin”²⁶⁾で用いられた「スポーツへの関与に関する7変数」から因子分析を行い、スポーツに関する態度スコアと定義した。

第3項 スポーツに関する態度因子

本研究では、1) 自信、2) 自己満足、3) 生産的であること、4) 自由度、5) 勝利への欲求、6) 家族の影響、7) スポーツへの認識、8) 判断への恐怖の8因子をスポーツに関する態度因子とした。

第4項 モチベーション

本研究では、人生におけるモチベーションを「人生の中で行動を起こす意欲や動機」と定義している。調査紙での質問項目においては、高校生がより理解できるようにするため「生活の中で大切にしていること」と定義した。

第2章 先行研究

第1節 イギリスにおける Youth Insight Pack における研究

イギリスにおいても若者の運動離れは深刻であり、Sport England は 2014 年にその現状を正確に把握するため、これまでの基礎研究をもととした Youth Insight Pack²⁶⁾を発表した。Youth Insight Pack とはイギリスにおいて Sport England が実施したスポーツに対する若者の態度や行動に関する研究をまとめた報告書である。この報告書では「若者への理解：概要」「若者への理解：態度と行動」「若者の魅力：新しい層へのアプローチ」の主要な3つのセクションによって、イギリスにおける若者への理解とそれを基にしたスポーツ・身体活動促進へのアプローチを説明している。

第1項 若者への理解：概要

このセクションでは若者とスポーツの関係などの概要を理解するために、14 歳から 25 歳のライフスタイルや生活環境などを示しているセクションである。このセクションで示されたことが以下である。

1. 若者が持つ新しいアイデンティティ

イギリスの若者は自らのイメージを自分自身で認識している。そして、スポーツが自分自身をさらに成長させてくれるものだとして認識しているが、「自分の経験を形にすること」や「自分のペースで物事を進めること」「挑戦・成長はしたいが、失敗・屈辱は嫌だ」などの条件などがある。

2. 他者（友人や家族）との事柄

ライフスタイルは友人や家族との経験に基づいて構成されており、それは SNS を通じて拡大されている。スポーツとの関わりとしても、若者たちと関係している社会的集団がどのようなものであり、どのようにスポーツに対して適合するかによって変化してくる。そのため、スポーツ実施の際には、隔離された経験のような気分は避けなければならない。また、エリートアスリートなどの高レベルの水準によって 10 代の内に競技スポーツでの人生設計には妥協を必要とするという印象を強めている。

3. ライフスタイルにおけるテクノロジーの重要性

若者のライフスタイルにおいてテクノロジーは重要な存在である。図1はイギリスの若者が1週間の内に各アクティビティで過ごした時間を示している。この図からもイギリスの若者はテクノロジーを使うアクティビティに多くの時間を費やしていることがわかる。また、特に10代の若い世代の日常生活においては親などから観察されていることが多い。そのため、若者はインターネットやSNSを幅広く利用することで、自分たちのライフスタイルを構築している。



図1 イギリスの若者の1週間の内に各アクティビティで過ごした時間
出所) Sport England (2014). p.10 より引用

第2項 若者への理解：態度と行動

1. スポーツと若者の関わり

スポーツと若者の関わりについてこれまでは図2のように考えられていた。しかし、調査によって実際には若者のスポーツや身体活動への関係性は「行動は常に同じではなく月ごとに異なる可能性がある」「態度と行動は必ずしも一致しない」「スポーツに関する肯定的な感情を示す若者が必ずしも積極的に参加を望んでいる訳ではない」「参加する行動や態度がスポーツ観戦の姿勢に必ずしも反映しているとは限らない」などのように、より複雑だということが判明した。



図 2 若者のスポーツとの関係についてよく考えられていたこと

出所) Sport England (2014). p.13 より引用

2. スポーツに対する態度への理解

若者のスポーツへの態度として「自分の経験を重視する」「個人的な目標の達成」「自身へのフィット感」などが挙げられる。これらを踏まえ、モチベーションにおいて重要なものは楽しいものよりも自身にとって「機能的」であることだということが示された。つまり機能的であるということにおいて若者が求めていることはスポーツにおける結果ではなく自身へのフィット感、それによって個人的な目標達成につなげることが重要でありということだ。また、スポーツという言葉に対して、従来の競技スポーツを連想してしまい、それによってスポーツに対して障壁を作ってしまうことがある。そのため、スポーツという言葉を使用しない新しいスポーツを提供することが重要だとされた。

3. スポーツに対する行動への理解

1) 若者の行動を構築する周囲環境（受動的態度・能動的態度）

多くの若者は友人、家族または教育環境によってスポーツへの環境が構築される（受動的態度）。そのため、周囲の関係が変化することにより、スポーツへの参加が停止してしまう可能性がある。周囲の環境が変化するタイミングでできるだけ簡単に新しい習慣への参加を促すことが重要だ。しかし、若者が成長するにつれてスポーツへの参加はそれほど受動的ではなくなる（能動的態度）。そのため、成長するにつれてスポーツへの関心をより広いものにしなければならない。

2) 若者が行動する際の優先順位

若者が行動する際の優先順位として、若者は「自分たちの経験を形作ること」を重視している。そのため、有意義な経験を共有できるフェスティバルなどはすべての若者に人気があるものとなっている。若者は共有できる経験は好きであるが、習慣は共有することができない。そのため、目標達成までが短く、そのような体験を共有しやすいフィットネススポーツが一部台頭している。

4. スポーツへの態度と行動とそれに対する対応

図3は、イギリスの若者14歳から25歳におけるスポーツに対する態度と行動を人口数値と共に表したものである。スポーツへの態度をポジティブ、機能的および興味なしの3パターンで、運動頻度を高、中、低の3段階で表した。そしてこれまでの調査の結果を踏まえ、今まで行ってきたスポーツ参加への促進は既にスポーツに取り組んでいる人のためのものやスポーツに対してある程度の能力を備えている人（ポジティブ×運動頻度：高）への提供が多くなってしまっていたことが判明した。そのため、それ以外の層（機能的～興味なし×運動頻度：中、低）へのアプローチを行うことが重要であるとした。

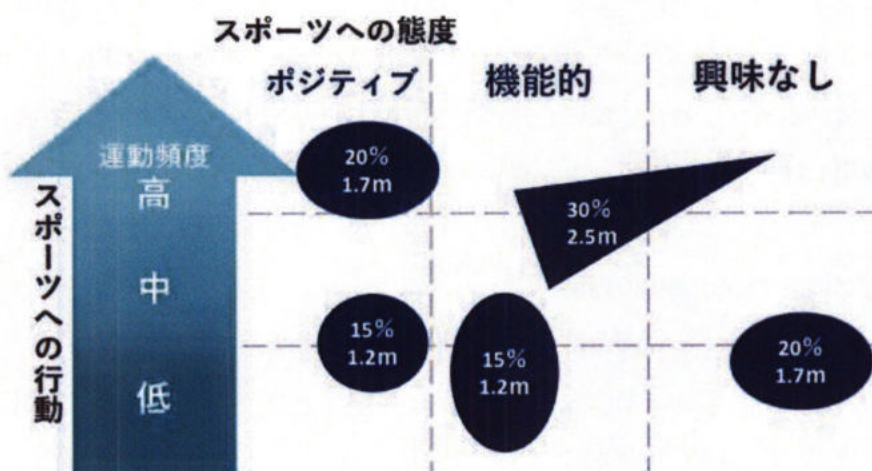


図3 イギリスにおける若者のスポーツに対する態度と行動

出所) Sport England (2014). p.19 より引用

第3項 若者の魅力：新しい層へのアプローチ

このセクションでは前項で述べたアプローチできていない層を「スポーツにポジティブであるがほとんど参加していない若者」「利益を認識してスポーツ活動と機能的関係を持つ若者」「スポーツに関心のない若者」の3つに分類し、図4に示したイギリスにおける若者全てに当てはまる経験やメッセージを作成し、これらの要素を原則としてそれぞれに対して主要な特徴とアプローチをする際の要素について示した。それらをまとめたものが図5である。

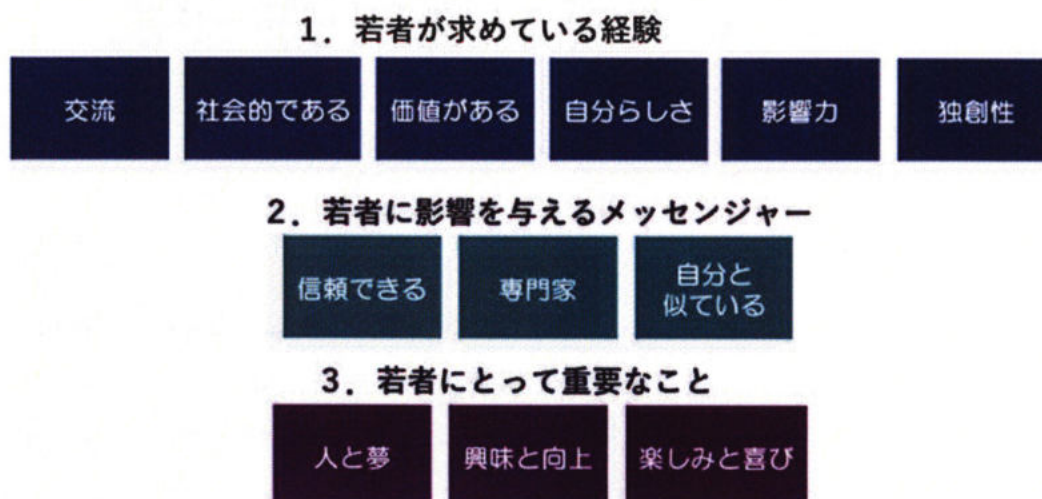


図4 イギリスにおける若者全てに当てはまる経験やメッセージ
出所) Sport England(2014). p.25 より引用

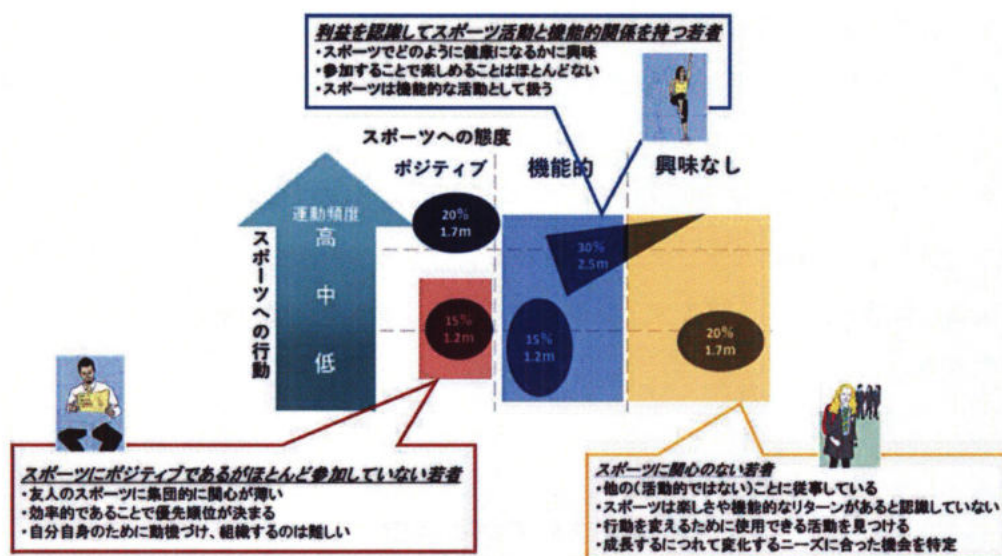


図 5 新しい3つの層の特徴とアプローチ

出所) Sport England (2014). p.19 より引用し編集

第2節 Under the Skin における研究

Under the skin²⁶⁾は Sport England が Youth Insight Pack²⁵⁾を基に、さらに若者を理解するために実施した研究である。Youth Insight Pack では若者全体にアプローチするための研究が行われたが、Under the skin では、さらに若者を質問紙調査で異なるパーソナリティのタイプに分けてインタビュー調査でそれぞれに対するアプローチを明らかにする研究が行われた。この分類された6つのタイプのパーソナリティは生活のモチベーションや態度を基に分類されているが、スポーツや基本的な人口統計(年齢、ジェンダーおよび教育)の影響も含まれた質問紙調査で分類されている。そして、徹底的なインタビュー調査によってそれぞれのグループの特性、規模、スポーツとの関わり方を考慮してグループ毎にスポーツ参加と継続を促すための最適なアプローチ方法を明らかにした。

第1項 各パーソナリティにおける項目

Under the Skin において分類された各パーソナリティは「パーソナリティの概要」「人生において重要なこと」「スポーツと身体活動について」「アプローチ: Attract their attention (注意を引き付ける)」「アプローチ: Deliver against their expectations (期待に応える)」「アプローチ: Keep them coming back (持続的に戻って来てもらう)」の主要な6つの項目において説明されている。

1. パーソナリティの概要

「パーソナリティの概要」では定義された特性、グループサイズ、スポーツ・身体活動への参加の程度などが示されている。

2. 人生において重要なこと

「人生において重要なこと」では彼らがどのような人物なのか（男女比や収入など）、彼らの人生、そして彼らにとって重要なものに関するデータが示されている。彼らの人生を理解する上で重要なデータとして「8つの態度因子」と「人生におけるモチベーション」が挙げられる。8つの態度因子は「自信(Self-confidence)」「自己満足(Self-contentment)」「生産的であること(Being productive)」「自由の感覚(Sense of freedom)」「勝利への欲求(Desire to win)」「家族の影響(Family influence)」「スポーツの認識(Perception of sport)」「判断への恐怖(Fear of judgement)」で構成されている。「人生におけるモチベーション」は「目標達成」「成功」「競争」「人として成長」「価値がある」「外見をよくする」「健康を維持」「楽しさ」「いい気分」「リラックス」「友人」「家族」「自主性」で構成されており、各パーソナリティの人生において、重要視している要素を理解することができる。

3. スポーツと身体活動について

「スポーツと身体活動について」ではスポーツへの態度を理解するため、感情的関与スコア (Emotional engagement with sport) と理性的関与スコア (Rational engagement with sport) の2つのスコアが示されている。この2つのスコアは最小値を0から最大値を100で作られており、スコアの数値が高いほどスポーツ・身体活動との関係性が強く、好意的であることを示している。

4. アプローチ：Attract their attention（注意を引き付ける）

「アプローチ：Attract their attention（注意を引き付ける）」はマーケティングとコミュニケーションをサポートするために各パーソナリティの注意を引き付けるための実践的な指針である。例えば「このパーソナリティには何が目立ち、気づかれるか」、「何に魅力を感じて始める行動に移るか」などである。

5. アプローチ：Deliver against their expectations（期待に応える）

「アプローチ：Deliver against their expectations（期待に応える）」はパーソナリティのための適切な環境と経験を提供するための原則である。例えば「このパーソナリティにはどんなタイプの経験と環境が適しているか」などである。

6. アプローチ：Keep them coming back（持続的に戻ってきてもらう）

「アプローチ：Keep them coming back（持続的に戻ってきてもらう）」はパーソナリティが活動に関わり続けるように促し、より頻繁に参加するためのヒントである。例えば「このパーソナリティはどのようにしてより定期的に参加するようになるか」、「スポーツと運動との関係をどのように強化できるか」などである。

第2項 Under the Skin における6つのパーソナリティ

図6は Under the Skin において分類された6つのパーソナリティである。また、図7は各パーソナリティにおける3つのアプローチである。このように Under the Skin では若者を各パーソナリティに分類して、それぞれに対して「Attract their attention（注意を引き付ける）」「Deliver against their expectations（期待に応える）」「Keep them coming back（持続的に戻ってきてもらう）」の3つの側面からのアプローチ方法を示した。

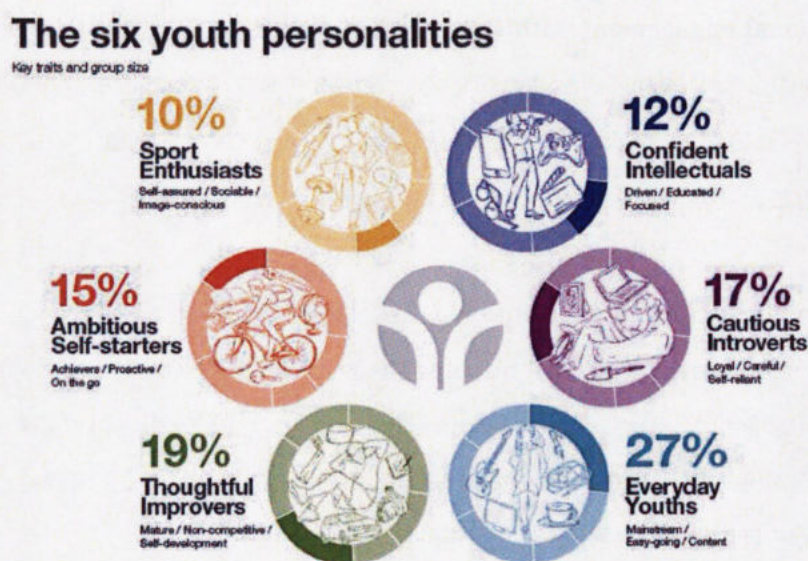


図6 Under the Skin における6つのパーソナリティ
出所) Sport England (2015). p.12 より引用

	 Attract their attention	 Deliver against their expectations	 Keep them coming back
10% More than they are currently active or involved in activities	<ul style="list-style-type: none"> Make sure they are confident and active when they start Use positive reinforcement to build self-esteem Turn them into role models for others 	<ul style="list-style-type: none"> Create a suitable environment... with a work hard - play hard atmosphere 	<ul style="list-style-type: none"> Support them to consistently improve Help them achieve emotional goals Don't forget about the girls
15% Offer them a challenge	<ul style="list-style-type: none"> Present them with opportunities to develop new skills 	<ul style="list-style-type: none"> Help them prioritise activities they're good at Encourage them to compete and progress - against themselves or others 	<ul style="list-style-type: none"> Continue to challenge them Keep it flexible Help them stay committed when life changes
19% Highlight opportunities to reach personal goals	<ul style="list-style-type: none"> Tap into their fitness and weight loss motivation 	<ul style="list-style-type: none"> Keep it safe and supportive to reduce fear of judgement Create a fun, friendly and relaxed environment 	<ul style="list-style-type: none"> Give them something to be proud of Make them feel part of something Make competition fun
27% Build on what they are already doing	<ul style="list-style-type: none"> Get the girls to take ownership Encourage them to give a gift to someone else 	<ul style="list-style-type: none"> Keep it fun, friendly and relaxed Don't ask too much of them 	<ul style="list-style-type: none"> Let them drop in and out Encourage friendship across the whole group Offer incentives and CV enhancing opportunities
17% Connect them to what they are already doing	<ul style="list-style-type: none"> Don't bring them back to what they were doing Keep it short and snappy 	<ul style="list-style-type: none"> Reassure them and build their confidence Help them to enjoy and feel good about themselves 	<ul style="list-style-type: none"> Recognise and reward taking part Open up new opportunities as they develop long term
12% Highlight opportunities to reach personal goals	<ul style="list-style-type: none"> Reassure them they don't need to be perfect to take part Don't bring them back to what they were doing 	<ul style="list-style-type: none"> Create a familiar, structured environment to help them feel supported Help them develop their skills and keep the playing field level 	<ul style="list-style-type: none"> Recognise and reward improvement and perseverance Highlight how they can enhance their CV

図 7 3つの要素からの6つのパーソナリティへのアプローチの方法
出所) Sport England (2015). p.14-49 より引用して編集

第3節 日本における若者へのスポーツ促進・アプローチについての取り組み

イギリスにおいては Sport England の Under the Skin²⁶⁾、Youth Insight Pack²⁵⁾などの調査によって、若者に対するスポーツ促進のアプローチ方法へと取り組んでいた。

対して、日本における若者に対するスポーツ促進のアプローチについての取り組みにはどのようなものがあるのか以下に示す。

第1項 第2期スポーツ基本計画

1. 第2期スポーツ基本計画の概要

スポーツ立国の実現を目指すスポーツ基本計画¹⁵⁾が2012年に制定され、引き続き2020年東京オリンピックおよびその先を含む5年間のスポーツの重要な指針となる「第2期スポーツ基本計画」³⁰⁾が発表された。第2期計画では、スポーツの価値に関して、①スポーツで人生が変わる、②スポーツで社会を変える、③スポーツで世界とつながる、④スポーツで未来を創るという4つの観点から、スポーツ参画人口を拡大し、他分野との連携・協力により「一億総スポーツ社会」の実現に取り組むことを、基本方針として提示されている。そして、4つの政策目標、19の施策目標、139の具体的施策としてとりまとめられた。学校体育をはじめ子供のスポーツに関する項目における施策目標として、「自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生を80%にすること。スポーツが嫌い・やや嫌いで

ある中学生を 16.4%から 8%まで半減させること、子供の体力水準を昭和 60 年頃の水準まで引き上げることが口指す。」³⁰⁾としている。上記の施策目標を達成するために学校教育や子供のスポーツなど若者へ向けられた施策などを以下に示す。

2. 体育・保健体育の学習指導要領の改訂

スポーツ庁³⁰⁾は「体育・保健体育の学習指導要領の改訂において、体力や技能の程度、障害の有無及び性別・年齢にかかわらず、スポーツの多様な楽しみ方を社会で実践できるよう、指導内容の改善を図ることにより、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成を図る。」としており、体育などを指導する指導者側の改善を行うことで若者へ対してスポーツの多様な楽しみ方を実践できるようにするとしている。

3. 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン

スポーツ庁³⁰⁾は運動部活動に関する総合的な実態調査をもとに「生徒の発達段階等を考慮した練習時間・休養日の設定や、複数種目の実施など女子生徒や障害のある生徒等のニーズにも応じた多様な運動部活動の展開を含む運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインを策定する。」としており、若者がスポーツへ参加する機会に重要な影響を与えている運動部活動に関してガイドラインを策定し、若者のニーズに応えるとしている。

第 2 項 平成 30 年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）

第 2 期スポーツ基本計画³⁰⁾では「体育・保健体育の学習指導要領の改訂」が示された。そのため今項では高等学校学習指導要領（体育・保健体育）¹³⁾について示す。

1. 平成 30 年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）の概要

文部科学省の高等学校学習指導要領（体育・保健体育）¹⁴⁾では保健体育を通しての学習の目標として「体育の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続するとともに、自己の状況に応じて体力の向上を図るための資質・能力を育成することを旨とする。」（文部科学省，2018）¹⁴⁾とした。この目標を達成するために、運動に関する領域である体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道及びダンスにおいて「知識及び技能（運動）」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」¹⁴⁾の 3 つの内容を示している。

2. 体づくり運動における「知識及び運動」の内容

表1は体づくり運動における「知識」の内容である。高校入学年次からその次の年次以降では「体力の高め方」や「実生活への取り入れ方」が内容として示されている。また、「運動」に関しては表2のように高等学校学習指導要領¹⁴⁾に示されていた。高校入学年次からその次の年次以降では「記録や技に挑戦したり、簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけるなどして試合をしたり、発表したりできるようにする」や「身に付けた技能や動き等の出来映えを確かめたり、新たに技や動き及び得意技を身に付けたりして、記録や技に挑戦」などが内容として示されている。

表1 体づくり運動における「知識」の指導内容

出所) 文部科学省 (2018). p.46 より引用

各段階で示した「知識」の主な表記

中学校1年・2年	中学校3年・高校入学年次	高校その次の年次以降
・体づくり運動の意義と行い方、体の動きを高める方法	・運動を継続する意義、体の構造、運動の原則	・体づくり運動の行い方、体力の構成要素、実生活への取り入れ方
・運動の特性や成り立ち ・技術(技)の名称や行い方	・技術(技)の名称や行い方	・技術(技)の名称や行い方
・関連して高まる体力	・体力の高め方	・体力の高め方
・伝統的な考え方	・伝統的な考え方	・伝統的な考え方
・表現の仕方	・交流や発表の仕方 ・踊りの特徴と表現の仕方	・競技会、試合、発表の仕方 ・文化的背景と表現の仕方
など	・運動観察の方法 ・見取り稽古の仕方 など	・課題解決の方法 ・見取り稽古の仕方 など

表2 体づくり運動における「運動」の指導内容

入学年次	その次の年次以降
・選択した領域の基本的な技能や動きを身に付ける	・身に付けた技能や動き等の出来映えを確かめたり、新たに技や動き及び得意技を身に付けたりして、記録や技に挑戦
・記録や技に挑戦したり、簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけるなどして試合をしたり、発表したりできるようにする	・参加者の体力や技能の程度、年齢や性別、障害の有無等に応じてルールを工夫するなどして試合をしたり、発表したりできるようにする
・運動やスポーツの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができるようにする	・運動やスポーツの多様な関わり方を状況に応じて選択し、家庭や地域及び職場などの多様な機会でも卒業後も継続して実践することができるようにする

3. 体づくり運動における「思考力、判断力、表現力等」の内容

表3は体づくり運動における「思考力、判断力、表現力等」の内容である。高校入学年次からその次の年次以降では体の動かし方や行い方の「動きを分析して良い点や修正点を

指摘する」や「課題解決のための練習の計画を立てる」などが内容として示されている。

表 3 体づくり運動における「思考力、判断力、表現力等」の指導内容

出所) 文部科学省 (2018). p.48 より引用

各段階で示した「思考力、判断力、表現力等」の主な表記

	中学校1年・2年	中学校3年・高校入学年次	高校その次の年次以降
学習指導要領	自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己(や仲間)の考えたことを他者に伝えること	自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己(や仲間)の考えたことを他者に伝えること	生涯にわたって運動を豊かに継続するための自己や仲間の課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けて取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること
体の動かし方や行い方	・課題や出来映えを伝える ・自己の課題に応じて練習方法を選ぶ	・合理的な動きと比較して成果や改善すべきポイントと理由を伝える ・自己や仲間の課題や練習方法について伝える	・動きを分析して良い点や修正点を指摘する ・課題解決のための練習の計画を立てる ・課題解決の過程を踏まえて新たな課題を発見する
体力や健康・安全	・安全上の留意点を他の学習場面に当てはめ、伝える	・体調や環境に応じた適切な練習方法等について振り返る ・運動に必要な準備運動や自己が取り組む補助運動を選ぶ	・危険を回避するための活動の仕方を提案する
運動実践につながる態度	・最善を尽くす(伝統的な所作)などのよい取組を見付け、伝える ・分担した役割に応じた活動のしかたを見付ける ・提示された仕方に当てはめ、関わり方を見付ける ・違いを踏まえて楽しむ方法を見付け、伝える	・よりよいマナーや行為(所作)について自己の活動を振り返る ・分担した役割の成果などについて自己の活動を振り返る ・合意形成するための関わり方を見付け、伝える ・違いに配慮して楽しむ活動の方法や修正の仕方を見付ける	・よりよいルールやマナー(所作)について提案する ・状況に応じて役割を提案する ・合意を形成するための調整の仕方を見付ける ・違いを越えて楽しむための調整の仕方を見付ける ・生涯にわたって楽しむための関わり方を見付ける
生涯スポーツの設計		・運動を継続して楽しむための関わり方を見付ける	

4. 体づくり運動における「学びに向かう力、人間性等」の指導内容

表4は体づくり運動における「学びに向かう力、人間性等」の内容である。高校入学年次からその次の年次以降では公正の「相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする」や参画・共生の「合意形成に貢献しようとする」などが内容として示されている。

表 4 体づくり運動における「学びに向かう力、人間性等」の指導内容
出所) 文部科学省 (2018). p.48 より引用

各段階で示した「学びに向かう力、人間性等」の主な表記

指導事項	中学校1年・2年	中学校3年・高校入学年次	高校その次の年次以降
ア 共通事項	積極的に取り組もうとする	自主的に取り組もうとする	主体的に取り組もうとする
イ 公正	勝敗などを認め、ルールやマナーを守ろうとする	勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする	
	フェアなプレイを守ろうとする	フェアなプレイを大切にしようとする	
	相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を守ろうとする	相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする	
ウ 協力・責任	よい演技を認めようとする	よい演技を讃えようとする	
	仲間の学習を援助しようとする	互いに助け合い教え合おうとする	互いに助け合い高め合おうとする
	分担した役割を果たそうとする	自己の責任を果たそうとする	役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとする
エ 参画・共生	話合いに参加しようとする	話合いに貢献しようとする	合意形成に貢献しようとする
	一人一人の違いを認めようとする	一人一人の違いを大切にしようとする	
オ 健康・安全	健康・安全に気を配る	健康安全を確保する	

第3項 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン

1. 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインの概要

第2期スポーツ基本計画³⁰⁾では「運動部活動に関してガイドラインの策定」²⁰⁾が示された。そのため今項ではスポーツ庁が発表した「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」³²⁾について示す。このガイドラインでは「運動部活動を主な対象とし、生徒にとって望ましいスポーツ環境を構築するという観点に立ち、運動部活動が以下の点を重視して、地域、学校、競技種目等に応じた多様な形で最適に実施されることを目指す。」³²⁾とされたガイドラインである。このガイドラインでは「1. 適切な運営のための体制整備」「2. 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組」「3. 適切な休養日等の設定」「4. 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備」「5. 学校単位で参加する大会等の見直し」の5つの内容が示されている。今項ではこの5つの中から若者へのアプローチについての内容である「合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組」「適切な休養日等の設定」「生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備」「学校単位で参加する大会等の見直し」の4つに注目した。

2. 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組

合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組では(1)適切な指導の実施、

(2) 運動部活動用指導手引の普及・活用の2つが示された。表5に詳細を示した。

表5 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容

合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組	
(1)適切な指導の実施	(2)運動部活動用指導手引の普及・活用
生徒の心身の健康管理(スポーツ障害・外傷の予防やバランスのとれた学校生活への配慮等を含む)	中央競技団体は運動部活動における合理的・効率的・効果的な活動のための指導手引を作成する
事故防止(活動場所における施設・設備の点検や活動における安全対策等)	中央競技団体は都道府県等と連携して普及を図る
体罰・ハラスメントの根絶	運動部顧問は指導手引に基づく指導を行う
トレーニング効果を得るために休養を適切に取ること	
生徒の体力の向上	
生涯を通じてスポーツに親しむ基礎を培う	
生徒とコミュニケーションを十分に図る	
生徒がバーンアウトすることなく、技能や記録の向上等それぞれの目標を達成できるようにする	
競技種目の特性等を踏まえた科学的トレーニングの積極的な導入	
短時間で効果が得られる指導を行う	
発達の個人差や女子の成長期における体と心の状態等に知識を得た上で指導	

3. 適切な休養日等の設定

適切な休養日等の設定では「週当たり2日以上(1)の休養日を設ける」、「できるだけ短時間に合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う」などが示されている。表6に詳細を示す。

表6 適切な休養日等の設定の内容

適切な休養日等の設定
週当たり2日以上(1)の休養日を設ける
長期休業中の休養日の設定は学期中に準じた扱いを行う
1日の活動時間は平日2時間程度、休業日は3時間程度
できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う

4. 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備

生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備では(1)生徒のニーズを踏まえた運動部の設置、(2)地域との連携等の2つが示されている。表7に詳細を示す。

表 7 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備の内容

生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備	
(1)生徒のニーズを踏まえた運動部の設置	(2)地域との連携等
生徒の多様なニーズ活動を行うことができる運動部を設置する。 ・競技力の向上 ・友達と楽しめる ・適度な頻度で行える	学校と地域が協働・融合した形での地域におけるスポーツ環境整備を進める
多くの生徒の運動機会の創出が具体的な例 ・季節ごとに異なるスポーツを行う活動 ・競技志向でなくレクリエーション志向で行う活動 ・体力づくりを目的とした活動 ・生徒が楽しく体を動かす習慣の形成に向けた動機付け	スポーツ指導者の質の向上に関する取組に協力する ・部活動指導員の任用・配置 ・運動部顧問等に対する研修
少子化に伴い単一の学校では特定の競技の運動部を設けることができない場合は合同部活動等の取組を推進する	生徒がスポーツに親しめる場所が確保できるよう学校体育施設開放事業を推進する

5. 学校単位で参加する大会等の見直し

学校単位で参加する大会等の見直しでは「運営の在り方に関する見直し」、「生徒や運動部顧問の過度な負担とならないようにする」などが示されている。表8に詳細を示す。

表 8 学校単位で参加する大会等の見直しの内容

学校単位で参加する大会等の見直し
運営の在り方に関する見直し ・単一の学校からの複数チームの参加 ・複数校合同チームの全国大会等への参加 ・学校と連携した地域クラブなどの参加資格の在り方 ・大会の規模もしくは日程等の在り方 ・スポーツボランティア等の外部人材の活用などの
生徒や運動部顧問の過度な負担とならないようにする ・学校の運動部が参加する大会・試合の全体像を把握 ・週末等に開催される様々な大会・試合に参加すること

第4項 スポーツへの関わりに関する研究動向

上記の項では日本における国や自治体の施策などを示した。今項では日本でのスポーツ関与に関する研究を野邊・梶房¹⁸⁾によるスポーツへの関わりに関する研究動向によって以下に示す。この研究では1. スポーツの実施・非実施に関する研究、2. スポーツの継続的な関わりに関する研究、3. スポーツからの離脱行動に関する研究の3つの視点から実施されていた。

1. スポーツの実施・非実施に関する研究

スポーツ実施・非実施に関する研究としてはスポーツ社会化論における「スポーツへの社会化、スポーツによる社会化の2つの側面から研究されている。」⁴³⁾とされ、この2つの側面の内、スポーツへの社会化の側面に関する研究でスポーツ行動を規定する要因が明らかにされている。スポーツへの社会化とは「スポーツの技術や知識、規範、スポーツに対する態度、価値などを内面化することによって、その集団や社会に相応しいスポーツ的行動様式を身につけていくことである。」⁴⁸⁾とされている。以下に主要な3つの研究を示す。

1) 荒井・松田²⁾の研究では「スポーツを好む者ほど仕事と余暇について考え方が両立志向であった。また、所得や自由時間などの時間的要因についてはスポーツ活動を妨げる要因ではなかった。」とされた。2) 松田ほか¹²⁾はスポーツ選択行動の要因として「現在活動要因(時間帯, 場所, 仲間, 指導者), 客体的要因(結婚, 子供, 所得, 環境, 余暇時間), 主体的要因(余暇観, 技能, 好嫌態度, 欲求, 効用態度, 体力の自信, 運動不足観), 運動経験要因(きっかけ, 学校時代, クラブ経験), マスコミ要因(テレビ, 新聞)」をあげている。3) 金崎⁶⁾によってスポーツ行動との関連が明らかにされている要因として、「『性・年齢・結婚』『学業と職業』『所得』『出生条件』『スポーツクラブへの所属』『スポーツ技能』『スポーツ指導者』『スポーツに対する態度』『スポーツに対する行動意図』『規範信念』『パーソナリティ』」があげられている。

2. スポーツの継続的な関わりに関する研究

金崎⁶⁾によると、「比較的長期にわたるスポーツ行動の継続的実施の説明となると、スポーツの目的論や手段論あるいはスポーツへの社会化研究での方法論を超えたもっと別の視点からのアプローチが必要」としており、それを説明する要因を金崎⁶⁾はスポーツ・コミットメントとして、「スポーツへの到達, 執着, 結びつき, あるいはスポーツ行動やスポーツ集団に身を投入すること」⁷⁾と定義した。また、金崎⁶⁾は「学校時代の体育の授業や行事での経験や課外でのスポーツ活動など学校体育に関する諸要因が、学校卒業後の社会人のスポーツ・コミットメントと関連している」ことを改めて明らかにした。金崎・橋本⁴⁾においても、スポーツ・コミットメントの形成要因として、「過去のスポーツ経験や重要な他者の存在」をあげている。

3. スポーツからの離脱行動に関する研究

スポーツからの離脱行動としてバーンアウトに関する研究が行われた。中込・岸¹⁷⁾はバーンアウトの変容過程として「競技での成功経験→競技への熱中→競技成績の停滞→競技への固執→バーンアウト」といった変容過程を明らかにした。

4. 研究動向への考察

野邊・梶房¹⁸⁾は上記の研究動向について1) 研究方法、2) 注目時期の2点の考察をしている。1) 研究方法では「スポーツ行動の規定要因を明らかにする場合は量的調査が行われている。また、個人がスポーツや他者とどのように関わっているのかに着目する場合インタビューをはじめとする質的調査が行われている。」とし、さらに今後は、量的調査と質的調査とがお互いに関連しながら発展していくことが求められるだろう。」とも示している。2) 注目時期ではスポーツへの関わりに関する研究の際に注目される時期に対して「参加—継続—離脱というその時期ごとに焦点を当てて研究が行われていたことである。」と述べている。

第5項 日本におけるスポーツ促進についての取り組みのまとめ

1. 「指導要領・ガイドライン」に関するまとめ

上記の日本におけるスポーツ促進に関する先行研究からスポーツ庁³⁰⁾は若者へスポーツ促進のアプローチを行うために「体育・保健体育の学習指導要領の改訂」や「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインの策定」などを実施していることが判明した。

2. スポーツへの関わりに関する研究動向のまとめ

スポーツへの関わりに関する研究動向では(1) スポーツの実施・非実施に関する研究、(2) スポーツの継続的な関わりに関する研究、(3) スポーツからの離脱行動に関する研究の3つの視点から研究が実施された。

野邊・梶房¹⁷⁾により1) スポーツ行動の規定要因を明らかにする場合は量的調査、個人とスポーツや他者との関わりに着目する場合は質的調査が行われており、今後は量的調査と質的調査とがお互いに関連しながら発展していくことが求められるということ、2) スポーツへの関わりに関する研究で注目される時期は参加—継続—離脱であり、それらの時期ごとに焦点を当てて研究が行われていたことが判明した。しかし、上記に示した量的、

質的のお互いに関連しながら参加—継続—離脱の3つ全てに注目したスポーツへの関わりに関する研究は行われていない。

第4節 日本の若者のスポーツ・身体活動とパーソナリティの分類における研究

目良¹⁹⁾は Sport England で行われたパーソナリティ分類における調査内容を再分析し、日本においても応用できるよう調査項目と分析方法の検討を行った。

第1項 Sport England で行われた調査項目の再分析と日本での応用

Sport England で行われた調査は質問紙調査で行われ、質問項目は1) 個人的属性、2) スポーツへの関与に関する項目、3) 態度に関する項目、4) 人生のモチベーションに関する項目の4つの主要な項目で構成されていた。これらの項目を学識経験者とともに再翻訳し、日本独自の項目を追加することで日本における調査項目の作成を行った。

1. 個人的属性

Sport England における個人的属性の質問項目は1) 年齢、2) 性別、3) 現在、教育を受けているかの3項目であったが、日本における個人的属性の項目は1) 年齢、2) 性別、3) 部活動入部状況の3項目であった。

2. 運動・スポーツ活動に関する項目

運動・スポーツ活動に関する項目は、「運動・スポーツをすることが好きか」、「運動・スポーツを観ることが好きか」、「体育授業は好きか」の3項目が設定された。回答方法は Sport England に合わせ、5段階尺度のリッカートスケール法で評価された。

3. 生活環境に関する項目

生活環境に関する項目では主な交通手段、通学の所要時間を尋ねた。主な交通手段は複数選択可とし、徒歩に関しては「徒歩のみ」という設定がされた。

4. スポーツへの関与に関する項目

スポーツへの関与に関する質問項目は、7項目が設定された。回答方法は1つの質問項目を除き、5段階尺度のリッカートスケール法で評価された。

5. 態度に関する項目

態度に関する項目として、8因子24項目が設定された。態度に関する因子として、1) Self-confidence (4項目)、2) Self-contentment (2項目)、3) Being productive (3項目)、4) Sense of freedom (2項目)、5) Desire to win (2項目)、6) Family influence (2項目)、7) Perception of sport (5項目)、8) Fear of judgement (4項目)の8因子が使用された。回答方法は5段階尺度のリッカートスケール法で評価された。

6. 人生のモチベーションに関する項目

人生のモチベーションに関する項目は Sport England の調査で用いられた6項目と独自で設定した7項目を用い、あてはまるものを選択し回答するよう設定された。

第2項 Sport England で行われた分析方法の再分析と日本での応用

目良¹⁹⁾は Sport England で行われた調査における分析方法を再分析し、学識経験者とともに日本独自の質問項目にも対応した分析方法を作成した。

主な分析方法としては、記述統計、スポーツへの関与スコアの算出、態度に関する項目の算出、各因子・項目における男女間の比較、潜在クラスモデルによるクラスタリング、各クラスターの特徴、各クラスターにおける男女の差の検討の7つが実施された。

スポーツへの関与スコアの得点の算出ではスポーツへの関与スコアに関する項目を探索的因子分析により因子構造を探索したのち、構造方程式モデリング (Structural Equation Modelling, 以下 SEM) が行われ、得点の算出が行われた。それぞれのスコアの最小が0、最大が100となるようにスケーリングされた。また、内的整合性を確かめるため、信頼性係数 (α 係数) も算出された。態度に関する項目の算出では態度に関する8因子における全体の平均値、標準偏差が算出され、その後、信頼性係数 (α 係数) と SEM の算出が行われた。

潜在クラスモデルによるクラスタリングでは「スポーツへの関与スコアの算出」の結果得点と、その他の変数を用いて潜在クラス分析が行われた。潜在クラス分析によって分かれたクラスター間の比較を行うため、クロス集計表、記述統計表を用いて各クラスターの特徴が求められた。その後、態度に関する8因子において MANOVA・ANOVA が行われた。また、クラスター間のモチベーション比較をするためには χ^2 検定が行われた。

第3項 Sport England で行われた調査の日本での応用による結果

目良¹⁹⁾による Sport England で行われた調査の再分析と日本での応用により、以下の2点の手順を踏むことで Sport England でパーソナリティが分類されたものと同じように日本においてもパーソナリティが分類可能であることが明らかになった。1) スポーツへの関与スコアで用いられた7項目を探索的因子分析によって因子を算出したのち、最小値を0から最大値を100とし、得点化する。2) 態度に関する8因子、モチベーション7項目、個人的属性およびスポーツへの関与スコアを潜在クラスモデルで分析する。

また、目良¹⁹⁾は再分析の結果を以下のように捉えている。「再分析の結果から内的整合性を示す信頼性係数 (α 係数) と SEM の基準値はグレーゾーンであることが明らかとなった。学術的な面からは妥当性を有しているとは言えなかった。しかし、この分析方法が用いられ行われた、イギリスのキャンペーンは成功しており、普及用としての有用性はあることが示唆された。日本における調査でも、内的整合性を示す信頼性係数は $\alpha = .70$ を超えたものはなく、SEM も採択の基準には満たなかった。しかし、イギリスと同様に6つのパーソナリティに分類することができ、調査に用いられた態度に関する8因子、モチベーションにおいて6つのパーソナリティ間に有意差がみられた。よって、本研究で用いられた調査項目は、日本における女子高校生の運動・スポーツ参加促進のための調査項目として用いることができると考えた。」

上記の結果から日本においても Sport England の調査である Under the Skin²⁰⁾で行われたようなパーソナリティ分類が可能となった。この調査項目は「スポーツパーソナリティ調査項目」と名付けられた。

第5節 高校生のスポーツ実施促進に向けたパーソナリティ分類における研究

矢野⁴¹⁾においても、Sport England の調査“Under the Skin”²⁰⁾を参考に、高校生のライフスタイルや行動の特徴を調査し、高校生をスポーツに関するパーソナリティタイプに分類することを目的に研究を行った。矢野⁴¹⁾は目良¹⁹⁾が実施した調査の人数(約290名)に対し、より大規模な人数(約1900名)、多くの地域で調査を実施し、日本におけるパーソナリティ分類の手法をより確実なものとした。矢野⁴¹⁾の研究における調査項目は「スポーツパーソナリティ調査項目」が使用され、分析方法については目良¹⁹⁾と同じように「個人的属性」「ライフスタイル」「スポーツへの関与に関する項目」「態度因子の算出」「潜在クラス分析」「各クラスターの特徴」についての分析が行われた。

第1項 高校生のスポーツ促進のパーソナリティ分類研究の結論

矢野⁴¹⁾の研究において、以下のことが示された。1) スポーツへの関与に関する項目を分析したところ、Sport England と異なり、1因子のみとなった。2) スポーツへの関与スコアには男女差があることが確認された。3) スポーツへの態度因子の8因子全てにおいて男女差があることが確認された。4) 潜在クラス分析により O 県の高校生は7クラスター(パーソナリティ)に分類された。5) 分類されたパーソナリティにはそれぞれ特徴があり、グループサイズ、関与スコア、男女比、態度因子が異なることが明らかとなった。6) 学校偏差値別では、7つのパーソナリティのグループサイズ、関与スコア、男女比、態度因子は異なり、パーソナリティ間の態度因子も異なることが明らかとなった。7) 7つのパーソナリティ間に地域差はみられなかった。

矢野⁴¹⁾の結果から日本におけるパーソナリティ分類の手法が、より確実なものとなった。また、新たな発見として Sport England のスポーツへの関与に関する項目においてはスポーツへの態度を理解するため、感情的関与スコア (Emotional engagement with sport) と理性的関与スコア (Rational engagement with sport) の2つのスコアが示されているが、日本においてはこの因子が1因子しか存在しないことが明らかになった。

第6節 質的研究の特性・優位性と実施する意義

日良¹⁹⁾、矢野⁴¹⁾の研究において日本においても Sport England の調査のようにパーソナリティ分類を行うことが可能となったが Sport England の調査ではスポーツに関するパーソナリティ分類後にそれぞれのパーソナリティに対して徹底的なインタビュー調査を実施し、そのインタビュー調査によって、各パーソナリティへのアプローチ方法を導き出している。そのため、各パーソナリティへのアプローチ方法を導き出す際にはインタビュー調査による質的研究が重要となってくる。以下で、本研究において質的研究を行う重要性や意義を述べる。

第1項 質的研究の特性

大谷¹⁹⁾は質的研究についてこう述べている。「対象を「量」でなく「質そのもの」において把握する研究が必要となる。それが質的研究である。また、量的に測定できるものすべてに意義があるわけではなく、意義あるものすべてが量的に測定できるわけではないそして、質的研究では、量的研究では検討することが困難な研究課題を扱う」。つまり、「質そのも

の」を把握する重要性とは「量」だけでは把握することが困難なものを理解するということにある。そして「質そのもの」を把握するために質的研究は存在することがわかる。

第2項 量的研究と質的研究の比較

前項では質的研究は「量」だけでは把握することが困難なものを理解するためであると述べたが、実際の研究において量的研究と質的研究にはどのような違いがあるのか以下に示した。

1. サンプルサイズ

量的研究において、サンプルサイズは「研究デザインの段階で、統計学的な必要によって決まる」。しかし、質的研究においては「非常に少ない人数のインタビューなどに基づくことがあり、 $n=1$ の研究でさえ研究として立派に成立している」¹⁹⁾。

このように量的研究のサンプルサイズにおいては統計学的な必要によって数が決定するため比較的多くの人数を対象者とするが、質的研究のサンプルサイズにおいては「個別や具体を深く追究して深い意味を見出すことで、それが深ければ深いほど一般性や普遍性のある知見になると考える」²⁰⁾とされ、その背景には「対象がたとえ1人でも、その問いと答えが深ければ、回答者1人に関してのみデータ採取を行っているのではなく、その背景にいる多くの人に関するデータ採取も同時に行っているのだと考えることは、決して不合理ではない」²¹⁾という考え方があり、比較的少ない対象者を深く追求することが重要とされている。

2. 捉えるデータ・結果の違い

量的研究においてのデータや結果の扱い方について「データや分析結果を数量化する研究、質問文を事前に標準化する方法、などにより、具体的なケースからできるだけ離れ、普遍的に当てはまるような形で結論が述べられる」²²⁾と述べられている。一方、質的研究においてのデータや結果の扱い方については「具体的な人・状況に結びついた知見を実証的データに基づいて生み出していくこと」²³⁾と述べられている。つまり、量的研究においてフォーカスされる点は普遍的・標準化であるのに対し、質的研究において、フォーカスされる点は具体的・実証的であるということがわかる。

第3項 質的研究におけるデータの収集方法

表9は質的研究におけるデータの収集方法である。質的研究のデータ収集には面接法(口頭データ)と観察法(視聴データ)の2種類がある。また、面接法によるデータ収集の利点として「調査者と回答者の顔が見えることによって、回答者の疑問にその場で答えることができ、回答率と回答の質を上げられること」や「面接の状況や回答者の表情・動作なども収集することが可能である」³⁸⁾ということが挙げられている。

表9 質的研究におけるデータ収集法

出所) 寺下 (2011). p.414 より引用

面接(インタビュー)法：口頭データの収集

- ・個人面接
調査者と回答者が1対1で対面して聴取を行う
- ・集団面接(グループインタビュー)
 - ・フォーカスグループ
共通する問題を抱える対象を一度に複数名集めて聴取を行う
 - ・ブレインストーミング
複数の対象者が一度に集められ、他の意見を批判しないというルールの下、共通するテーマについて自由に意見を出し合う

観察法：視覚データの収集

- ・参与観察
観察者がフィールドへ参与し、同一化することを通してフィールドの内部の知識を獲得する
 - ・非参与観察
観察者がフィールドの一部として関与しない
 - ・写真や映像を用いた間接的な観察
-

表10は面接法における質問の構造である。各構造の特性として「構造化面接は質問の内容と順序が決まっており、回答の記入方法も統一されており、標準化されたデータが収集できる」「半構造化面接は大まかな質問の内容だけが決まっており、回答者の回答次第で深く掘り下げて意見を聞くことができる。質的研究の面接では一般的に用いられる方法で、新たに湧き上がった問いに対して柔軟に対応できる」「非構造化面接は質問内容が決定されておらず、面接によって問題点を探っていく際に用いられる」³⁸⁾とされている。

表 10 面接における質問の構造

出所) 寺下 (2011). p.414 より引用

構造化面接

質問の内容, 順序, 回答方法が完全に決定されており,
標準化されたデータを聴取することができる

半構造化面接

大まかな方向性を決めたインタビューガイドに従って
質問が行われ, 対話の流れに合わせて質問を変化させる
ことができ, 柔軟にその意見を聞き取ることが可能となる

非構造化面接

質問内容が決められておらず, 自然な会話などのなかから
問題点を探っていくことができる

第4項 質的研究の優位性・意義と方法

上記のことから、量的研究では比較的多くの対象者を扱う特性などから対象者を把握する上で普遍的に捉えてしまう。そのため、対象者を深く追求することで対象者を具体的に捉えることができることが、質的研究の優位性として挙げられる。また、質的研究が用いられるべき点として「新規な事象や課題であるため利用できる既知の研究的知見がなく、観察やインタビューをしてそのデータを分析する必要があるもの」¹⁹⁾とも述べられている。

本研究においては利用できる既知の研究的知見が少なく、さらに分類された各パーソナリティの特性を深く追求するためにはインタビューなどを実施してそのデータを分析する必要がある。そのため、本研究において、質的研究は必要であると考えられる。

また、データ収集の方法としては面接の状況や回答者の表情・動作なども収集することが可能であり、なおかつ Sport England の調査においても採用されている「面接（インタビュー）法」、質問の構造としては大まかな質問内容だけが決まっており、回答次第で深く掘り下げて意見を聞け、質的研究の面接では一般的に用いられる方法である「半構造化面接」が適正であると考えられる。

第7節 GTAにおける特性と優位性

前節では、質的研究を用いる意義を述べた。その質的研究においては「成果に焦点があたると同時に、過程にも焦点があたる」²³⁾と述べられるほど、分析方法などの過程が重要視されている。そのため、今節では、数ある質的研究の分析の中から本研究の分析方法において、グラウンデッドセオリーアプローチ (Grounded Theory Approach, 以下 GTA) を選択すべき意義を述べる。

第1項 質的研究における分析方法の種類

質的分析方法においてどのようなものがあるのか以下で示す。

1. 内容分析 (content analysis)

「内容分析はテキストのある特定の属性を客観的・体系的に同定し、推論を行うための方法である」³⁸⁾とされる。主にアンケートの自由記述や日記文などのすでに記述されたテキストの分析に適用でき、テキストの中で何が語られているのかを知るために利用することができる。表 11 は内容分析による手順である。

表 11 内容分析による手順
出所) 寺下 (2011). p.415 より引用

第1段階	リサーチクエスチョン(研究の問い)の決定
第2段階	質問への回答のデータ化 回答のなかから不要な部分を削除し、素データを作成する
第3段階	基礎分析 大量のデータをできる限り単純化する
第4段階	本分析 類似した意味内容の要素を探し、それらを適確に表す 表現へと置き換える
第5段階	カテゴリーの信頼性の確認 形成されたカテゴリーの信頼性を確認する

2. KJ法

KJ法は「データ分析の際は名刺程度の大きさのカードに転記したデータをグループ分けし、グループごとの関係を図解化した上で、それを文章化し解釈を行う」³⁹⁾手法であるとされる。日本においては一般的な手法とされているが、KJ法は「理論生成法や分類法ではなく発想法であり、アイデアを探索的に創り出す方法である」³⁸⁾とも述べられている。

3. GTA

GTAとは「データを基にして分析を進め、単なるデータの要約にとどまらず、データの中に出てきた現象がどのようなメカニズムで生じているのかを示す『理論』を産出しようとする研究方法である」²⁰⁾や「質的データからボトム・アップ的に、人と人との相互作用やそのプロセス・変化を説明・予測できる理論の生成を目的とした研究方法である」⁴⁰⁾や「ある特定の場で登場人物たちが演じる役割と相互作用、そして結果として生じる変化のプロセスを『理論』として表現しようとする」²⁰⁾などと述べられている。これらのことからGTAとは、質的データにおいての様々な要素の関係性や過程などを一つの理論として表現することであると理解できる。

4. M-GTA (Modified Grounded Theory Approach)

M-GTAとは木下²⁰⁾がGTAに修正を行ったものである。特徴として「GTAのような切片化がなく、コーディングもオープン・コーディングと選択的コーディングのみ。」や「切片化の代わりに、概念名や理論的メモなどを記入した「分析ワークシート」を導入。」²⁰⁾などが挙げられる。そのため、M-GTAはGTAとは異なる分析手法として認識されている。戈木²⁰⁾は異なる手法である点として「M-GTAでは、ストラウス版GTAの核となる「切片化」「プロパティ、ディメンション、ラベル」「軸足コーディング」を使用しないことによって作業の簡略化がなされている上に、GTAの特徴である「データ収集と分析とを交互に同時並行しておこなう」という方法を用いず、データをまとめて収集し、それらを分析した後で必要があれば追加収集するという方法が使われている。従って、GTAとM-GTAはまったく似て異なるものであると考えた方が良さそうである。」²⁰⁾と述べている。

第2項 様々なGTAのバージョン

GTAには、創始者である2人が別々につくったストラウス・コービン版とグレーザー版などのバージョンがある。グレーザー版は「数量的方法論の一部を共有する、言語データの厳密な分析手法」²⁰⁾であり、ストラウス・コービン版(SC-GTA)は「数量的方法論には頼らず、新たな理論と方法論の構築を試みる。」とされ、現在は「質的研究手法として地位を確立」²⁰⁾したとされている。本研究はデータを質的に見ることで分析を行うため、数量的方法論に頼らずに理論と方法論を構築するSC-GTAが適切であると考えられる。

第3項 GTAの特性と強み

GTAは、「データから『プロパティ』と『ディメンション』という下位の概念を抽出し、それらをもとにして少し抽象度の高い『ラベル名』を付け、さらに似たものを集めて『カテゴリー』という上位の概念をつくる仕組みによって、概念の抽象度を上げる際に分析者のバイアスがかかるリスクを減らそうとする。例えていえば、階段を1歩ずつ上がるように抽象度を上げていくようなものである。」²⁰⁾と述べられ、この概念と抽象度を構成するGTAの特性として概念の抽出やプロパティとディメンションやカテゴリー関連図などが挙げられ、これらが、分析が間違った方向に進まないための仕組みとなっている。

1. 概念の抽出

「質的研究では概念をとらえることが大切である」「とくに、GTAでは分析の結果として、概念の関係づけによって『理論』を捉えようとするので、概念を正確にとらえることがとても重要となる」²⁰⁾とされており、質的研究において、重要な要素となる概念抽出をGTAでは行うことができる。

2. プロパティとディメンション

「プロパティは分析者の視点を示すものである。これによって分析者に自分のものの見方を意識させ、他の見方の可能性にも気づかせる。一方、ディメンションは、各プロパティから見た時のデータの位置づけを示すものである。」²⁰⁾とされている。

3. カテゴリー関連図

「カテゴリー関連図は、1つの現象を形作る複数のカテゴリー（概念）を、プロパティとディメンションを使って結びつけることにより、カテゴリー同士がどのような根拠で結びついているのかを示すもの」²⁰⁾である。また、複数のカテゴリー関連図を統合したものを『カテゴリー関連統合図』と呼ぶ。

4. 分析が間違った方向に進まないための仕組み

質的研究では研究者本人が分析を実施するため、分析がブレ、間違った方向に進んでしまう時がある。GTAには「概念名（ラベル名、カテゴリー名）をつけるたびに、もととなった切片データと摺り合わせるというルールは、データと概念名とにブレがないかを分析者に確認させる。カテゴリー関連図を描くときにも、間違いがあれば、カテゴリーを関連

づけることができなくなることによって不都合を知らせる。」²⁰⁾と述べられたようにそれを防止する仕組みがある。このような仕組みがあることは GTA の強みである。

第4項 GTA を選択する意義

上記のように GTA には質的データにおいての様々な要素の関係性や過程などを一つの理論として表現することができる。この利点は他の分析方法にはないものである。さらにこの利点によって、本研究においても各パーソナリティにおける思考、行動などの様々な要素の関係性や過程などを一つの理論として表すことで、アプローチを導き出すことに繋げることができる。また、M-GTA との相違点として、GTA には概念・プロパティ・ディメンション・カテゴリーなどの、分析が間違った方向に進まないための仕組みがあるため、質的研究においての精度が高まる。これらが GTA を質的研究においての分析方法として選択する意義である。さらに、本研究はデータを質的に見ることで分析を行うため、GTA の中でも数量的方法論に頼らずに理論と方法論を構築する SC-GTA が適切であると考えられる。

第8節 先行研究のまとめ

先行研究を検討した結果、以下の8点が明らかとなった。

1. 若者のスポーツ・身体活動促進に関して同じ問題を抱えるイギリスではスポーツ参加を促すために新しい層に対するアプローチが行われた。
2. イギリスで行われた新しい層へのアプローチはスポーツに関するパーソナリティ分類を量的に行い、その上で各パーソナリティへのアプローチを質的に検討することであった。
3. 日本における若者へのスポーツ・身体活動に関するアプローチは主に「体育・保健体育の学習指導要領」や「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」によって定められている。
4. 日本におけるスポーツへの関わりに関する研究動向としては「量的調査と質的調査とがお互いに関連しながら発展していくこと」と「注目される時期は参加—継続—離脱」ということが示されたが、しかし、上記に示した量的、質的のお互いに関連しながら参加—継続—離脱の3つ全てに注目したスポーツへの関わりに関する研究は行われていない。

5. 日本においてもイギリス同様にスポーツに関するパーソナリティ分類を量的に行う方法が確立された。

6. 日本においてもスポーツに関するパーソナリティ分類を量的に行う方法が確立されたが各パーソナリティへのアプローチを質的に検討することはまだ行われていない。

7. 質的に各パーソナリティへのアプローチを検討することは各パーソナリティを深く追求するためにも必要である。

8. 質的データの分析方法は各パーソナリティにおける思考、行動などの様々な要素の関係性や過程などを一つの理論として表すことで、アプローチを導き出すことに繋げることができる GIA (SC-GIA) が適切である。

第9節 リサーチクエスション

本研究の目的は、高校生のスポーツ・身体活動の参加促進におけるパーソナリティを分類し、分類されたパーソナリティへのアプローチ方法について検討することである。また、分類された各パーソナリティへのアプローチ方法については、先行研究で得られた文部科学省¹⁴⁾で推奨されている「平成30年 高等学校学習指導要領 (体育・保健体育)」とスポーツ庁¹⁵⁾で推奨されている「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」との比較・検討を行うことであった。そのため、1) 日本人の高校生を対象にスポーツ・身体活動促進におけるパーソナリティ分類はできるのか。2) 各パーソナリティへのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチを検討できるのか。3) 各パーソナリティへのアプローチと日本で行われているアプローチの比較できるのか。の上記3つのリサーチクエスションを設定した。

第3章 研究方法

本研究においては、3つの調査を実施した。パーソナリティ調査1では高校生に対して、質問紙調査を行うことによってスポーツ・身体活動促進におけるパーソナリティ分類を行った。パーソナリティ調査2では分類された各パーソナリティに対して、インタビュー調査を行うことによって、各パーソナリティへのスポーツ・身体活動促進のためのアプローチを検討した。最後に日本の若者へのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチの比較では先行研究において明らかになった日本のスポーツ・身体活動における若者へのアプローチである指導要領やガイドラインと調査1、2で明らかになった各パーソナリティへのスポーツ・身体活動促進のアプローチを比較した。

第1節 パーソナリティ調査1

本研究では、パーソナリティ調査1として、スポーツ・身体活動促進におけるパーソナリティを分類する質問紙調査を実施した。

第1項 調査方法

1. 調査対象者

調査対象者はK県の偏差値50～60の県立高校の4校を指定した。学年としては高校の生活習慣や運動習慣が定着し、受験などの要因で定着した習慣が変化していないと考えられる高校2年生を選択した。調査人数は1874名の高校生を対象に調査を行った。

2. 調査項目

矢野⁴⁾が使用したスポーツパーソナリティ調査項目に新たに項目を追加した修正版スポーツパーソナリティ調査項目を使用した。

1) 個人的属性

個人的属性は1) 管理番号、2) 性別、3) 年齢であった。

2) 現在の運動・スポーツ活動について

高校生の現在の運動・スポーツ活動について把握するため、質問項目を設置した。質問項目としては(1)部活動加入状況、(2)文化部で身体トレーニングを行っているか、(3)

学校外での運動活動について、(4) 運動頻度、(5) 平日、休日の運動時間、(6) 家族とのスポーツ・運動経験についての6項目を設置した。部活動加入状況は「運動部」「文化部」「どちらも所属」「無所属」を設定した。学校外での運動活動は「民間スポーツクラブ」「地域の同好会」「総合型地域スポーツクラブ」「その他(自由記述)」を設定した。運動頻度は11段階尺度で作成し、変数として使用する際は回答の「1. 毎日」「2. ほぼ毎日」を「高」、「3. 週に2～3日」「4. 週に1日」を「中」、「5. 月に2～3日」「6. 月に1日」「7. 2～3ヶ月に1日」を「低」、「8. 4～5ヶ月に1日」「9. 半年に1日」「10. 半年に1日以下」、「全くしない」を「無」とし、4段階で使用した。平日の運動時間は6段階、休日の運動時間は11段階尺度で作成した。表12に質問項目を示す。

表 12 現在の運動・スポーツ活動についての項目

	質問番号	内容
現在の運動・スポーツ活動について	2-1.	部活動加入状況
	2-1a.	文化部で身体トレーニングを行っている
	2-2.	学校外での運動活動を行っている
	2-2a.	学校外での運動活動の形態
	2-3.	運動頻度
	2-4.	平日の運動時間
	2-5.	休日の運動時間
	2-6.	家族とのスポーツ・運動経験

3) 日常生活行動について

高校生の現在の日常生活行動について把握するため、質問項目を設置した。質問項目としては(1) 平日の睡眠時間、(2) 朝食摂取、(3) 1日のテレビの視聴時間、(4) 1日の動画の視聴時間、(5) 1日のゲーム時間、(6) 1日の携帯・スマートフォン利用時間の6項目を設置した。平日の睡眠時間は7段階、朝食摂取は5段階、1日の利用時間については各6段階尺度で作成した。表13に質問項目を示す。

表 13 日常生活行動についての項目

	質問番号	内容
日常生活行動について	3-1.	平日の睡眠時間
	3-2.	朝食摂取
	3-3.	1日のテレビの視聴時間
	3-4.	1日の動画の視聴時間
	3-5.	1日のゲーム時間
	3-6.	1日の携帯・スマートフォン利用時間

4) 生活環境について

高校生の生活環境について把握するため、質問項目を設置した。質問項目としては、通学手段についての1項目を設置した。通学手段については手段に徒歩、自転車が含まれるかどうかについて「はい」、「いいえ」の回答を設置し、その後「はい」と答えた対象者に通学の所有時間に対して6段階尺度の質問を設置した。表 14 に質問項目を示す。

表 14 生活環境についての項目

	質問番号	内容
生活環境について	4-1.	通学手段
	4-1a.	徒歩での通学所要時間
	4-1b.	自転車での通学所要時間

5) スポーツへの関与に関する項目

表 15 はスポーツへの関与に関する項目を示した。スポーツおよび個々のパーソナリティを探索するため「スポーツへの関与に関する因子（6項目）」を設置した。質問項目2-3（運動頻度）を除き「1.あてはまらない」から「5.あてはまる」の5段階尺度を用いた。

表 15 スポーツへの関与に関する項目

質問番号	内容
2-3.	現在、あなたは呼吸が上がる程度の運動を30分以上行う日がどのくらいありますか
5-1.	スポーツは私の一部である
5-2.	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる
5-4.	健康や体力を意識している
5-6.	ほとんどのスポーツが得意だ
5-7.	スポーツや運動はストレスを解消するのに良い方法である
5-8.	友達とスポーツについてたくさん話す

6) スポーツへの態度に関する項目

スポーツおよび個々のパーソナリティを探索するため「態度因子（8因子 24項目）」を設置した。回答には「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5段階尺度を用いた。表 16 はスポーツへの態度に関する因子とそれを構成する質問項目を示した。また、スポーツパーソナリティ調査項目では態度因子の「生産的であること」「自己満足」、「自由の感覚」、「勝利への欲求」、「家族の影響」において、1項目または2項目で調査項目が設定されており、それにより信頼係数が出せずにいた。そのため、本研究の調査においては信頼性を算出するために、様々な尺度から似た因子名の項目を上記の調査項目に追加し、各因子3項目以上になるよう設定を行った。表 17 は追加された調査項目と追加する際に参考とした引用元である。

表 16 態度因子の項目

因子	質問番号	内容
自信	5-45.	自分のために何か行動を起こすことができる
	5-46.	私は自信家である
	5-47.	私は楽観主義である
	5-50.	私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うことや新しい友達ができることは喜ばしいことだ
自己満足	5-13.	自分の身体に満足している
	5-16.	自分自身に満足している
	5-50.	満足感が持てない
生産的であること	5-3.	私は自由時間を有効に使いたい
	5-5.	私は常日頃行なっている日課がある
	5-11.	無駄な時間や労力は、なるべく費やしたくない
自由の感覚	5-10.	私には選択の自由がたくさんある
	5-19.	私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)
	5-61.	他人に邪魔されずに自分の意思で自由に行動したい
勝利への欲求	5-14.	競争心が強い、または負けず嫌いである
	5-18.	勝つことは私にとって最も重要なことである
	5-58.	他人と競争して勝つとうれしい
家族の影響	5-12.	家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない
	5-15.	私は家族と仲が良い
	5-59.	必要なときに、私の家族は私の心の支えとなる
スポーツの認識	5-9.	スポーツや運動で達成したことをシェアするためにSNSを使いたい
	5-20.	自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい
	5-22.	スポーツをしている同年代の人をカッコいいと思う
	5-48.	運動はまさに私のための時間である
	5-49.	スポーツをすることで、もっと人気者になれる
判断への恐怖	5-17.	みんなと同じように参加できるスポーツをしたい
	5-21.	運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる
	5-23.	スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ
	5-36.	得意でないことに取り組むことが嫌いだ

表 17 スポーツパーソナリティ調査項目への追加項目

態度因子	調査項目	引用元
自己満足	5-50. 満足感が持てない	自己肯定意識尺度(不健康-対自己領域充実感) 平石賢二(1990). 青年期における自己意識の構造-自己確立感と自己拡散感からみた心理学的健康-. 教育心理学研究 38(3), pp90-99.
生産的であること	5-11. 無駄な時間や労力は、なるべく費やしたくない	価値志向性尺度(経済) 酒井恵子・山口翔弘・久野雅樹(1998). 価値指向性尺度における一次元的階層性の検討-項目本能理論の適用. 教育心理学研究46, pp153-162
自由の感覚	5-61. 他人に邪魔されずに自分の意思で自由に行動したい	プライバシー志向性尺度(自由意志) 吉田圭吾・溝上慎一(1996). プライバシー志向性尺度(本邦版)に関する検討. 心理学研究67 (1), pp50-55.
勝利への欲求	5-58. 他人と競争して勝つとうれしい	達成動機測定尺度 堀野緑(1987). 達成動機の構成因子の分析 -達成動機概念の再検討. 教育心理学研究, 35 (2), pp148-154
家族の影響	5-15. 私は家族と仲が良い	日本語版ソーシャルサポート尺度(家族のサポート)
	5-59. 必要ときに、私の家族は私の心の支えとなる	岩佐一・権藤恭之・増井幸恵(2007). 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性並びに妥当性-中高年者を対象とした検討-. 厚生指標, 54(6), pp26-33.

4) 人生におけるモチベーション

表 18 は「人生におけるモチベーション (生活の中で大切にしていること)」を示した。14項目で複数回答可能と設定している。

表 18 人生におけるモチベーションに関する質問項目

質問番号	内容
6-1.	目標達成
6-2.	成功すること
6-3.	競争
6-4.	人として成長すること
6-5.	何か価値があることをすること
6-6.	外見をよくすること
6-7.	健康を維持すること
6-8.	楽しいこと
6-9.	良い気分になること
6-10.	リラックス(くつろぐ)こと
6-11.	友人と時間を過ごすこと
6-12.	家族と時間を過ごすこと
6-13.	自主的であること
6-14.	その他

第2項 分析方法

矢野⁴¹⁾の分析方法をもとに分析を実施した。統計分析には IBM SPSS Statistics Version 24 を用い、潜在クラスモデルには Latent-GOLD 5.1.0 を用いた。

1. 個人的属性とライフスタイルの検討

調査対象者の特徴を把握するため、個人的属性とライフスタイルに関する調査項目についての検討を行った。

2. スポーツへの関与に関する項目

矢野⁴⁾が実施した方法を用いて、各個人がスポーツに対してどの程度関与しているかを表す得点（スポーツへの関与スコア）を算出した。それぞれのスコアの最小が0、最大が100となるようにスケーリングした。表19にはスポーツへの関与に関する7変数を示した。

表 19 スポーツへの関与に関する項目

質問番号	内容
2-3.	現在、あなたは呼吸が上がる程度の運動を30分以上行う日がどのくらいありますか
5-1.	スポーツは私の一部である
5-2.	しばらくの間運動をしないと罪悪感を感じる
5-4.	健康や体力を意識している
5-6.	ほとんどのスポーツが得意だ
5-7.	スポーツや運動はストレスを解消するのに良い方法である
5-8.	友達とスポーツについてたくさん話す

3. 態度因子の算出

表20は8因子24項目の態度因子を示したものである。逆転項目2項目を逆転処理した上で、各因子に挙げられている変数の値を合計し算出した。対象者全体における項目の平均値、標準偏差および信頼係数を算出した。

表 20 態度因子の項目

因子	質問番号	内容
自信	5-45.	自分のために何か行動を起こすことができる
	5-46.	私は自信家である
	5-47.	私は楽観主義である
	5-50.	私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うことや新しい友達が出来るとは喜ばしいことだ
自己満足	5-13.	自分の身体に満足している
	5-16.	自分自身に満足している
	5-50.	満足感が持てない
生産的であること	5-3.	私は自由時間を有効に使いたい
	5-5.	私は常日頃行なっている日課がある
	5-11.	無駄な時間や労力は、なるべく費やしたくない
自由の感覚	5-10.	私には選択の自由がたくさんある
	5-19.	私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)
	5-61.	他人に邪魔されずに自分の意思で自由に行動したい
勝利への欲求	5-14.	競争心が強い、または負けず嫌いである
	5-18.	勝つことは私にとって最も重要なことである
	5-58.	他人と競争して勝つとうれしい
家族の影響	5-12.	家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない
	5-15.	私は家族と仲が良い
	5-59.	必要なときに、私の家族は私の心の支えとなる
スポーツの認識	5-9.	スポーツや運動で達成したことをシェアするためにSNSを使いたい
	5-20.	自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい
	5-22.	スポーツをしている同年代の人をカッコいいと思う
	5-48.	運動はまさに私のための時間である
	5-49.	スポーツをすることで、もっと人気者になれる
判断への恐怖	5-17.	みんなと同じように参加できるスポーツをしたい
	5-21.	運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる
	5-23.	スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ
	5-36.	得意でないことに取り組むことが嫌いだ

4. 潜在クラス分析によるクラスタリング

前項で得られたスポーツへの関与スコアと態度因子、人生におけるモチベーションや個人的属性を用いて対象者をクラスタリングし、各クラスターの特徴を把握することを目的とした。表 21 が潜在クラス分析に用いた変数である。クラスター数を動かして潜在クラス分析を行い、情報量基準 (BIC) の値を比較した。

表 21 潜在クラス分析に用いた項目

態度因子		
自信	5-45.	自分のために何か行動を起こすことができる
	5-46.	私は自信家である
	5-47.	私は楽観主義である
	5-50.	私が行うこと(スポーツなど)を通じて新しい人に出会うことや新しい友達が出来ることは喜ばしいことだ
自己満足	5-13.	自分の身体に満足している
	5-16.	自分自身に満足している
生産的であること	5-3.	私は自由時間を有効に使いたい
	5-5.	私は常日頃行なっている日課がある
	5-11.	無駄な時間や労力は、なるべく費やしたくない
自由の感覚	5-10.	私には選択の自由がたくさんある
	5-19.	私は友人の意見をよく受け入れる(寛容である)
勝利への欲求	5-14.	競争心が強い、または負けず嫌いである
	5-18.	勝つことは私にとって最も重要なことである
家族の影響	5-12.	家族は運動やスポーツをすることを私に勧めはしない
	5-30.	自分自身を限界まで追い込むことが好きである
スポーツの認識	5-9.	スポーツや運動で達成したことをシェアするためにSNSを使いたい
	5-20.	自分自身が気持ちよくプレーできるようなスポーツに参加したい
	5-22.	スポーツをしている同年代の人をカッコいいと思う
	5-48.	運動はまさに私のための時間である
	5-49.	スポーツをすることで外見が良くなる
判断への恐怖	5-17.	みんなと同じように参加できるスポーツをしたい
	5-21.	運動をしている姿を人に見られることを恥ずかしく感じる
	5-23.	スポーツや運動をしている時、バカにされていないか心配だ
	5-36.	得意でないことに取り組むことが嫌いだ
人生におけるモチベーション		
6-1.	目標達成	
6-2.	成功すること	
6-3.	競争	
6-4.	人として成長すること	
6-5.	何か価値があることをすること	
6-6.	外見をよくすること	
6-7.	健康を維持すること	
その他		
1.性別		
スポーツへの関与スコア		

5. 各クラスター個人的属性およびライフスタイルとの差の検討

各クラスターの特徴を明らかにするため、スポーツへの態度因子とクラスターの差の検定 (MANOVA) を行った。

6. 各クラスターにおける態度因子の差の検討

各クラスター間の態度因子の差の検定 (χ^2 検定) をおこなった。

第2節 パーソナリティ調査2

本研究では、パーソナリティ調査2として、パーソナリティ調査1において分類された各パーソナリティへインタビュー調査を実施し、スポーツ・身体活動促進のアプローチの検討を行った。

第1項 インタビュー調査

1. 調査対象者とインタビュー方法

パーソナリティ調査2では、パーソナリティ調査1で対象としたK県の高校、4校の中で、各パーソナリティの人数比が全体での比率とほぼ等しかった1校を指定、調査対象を高校2年生とした。調査人数はパーソナリティ調査1で分類した7つのパーソナリティにおいて、それぞれのパーソナリティの傾向が強い対象者を抽出し、男子17名、女子23名、計40名とした。実施した調査は1) グループインタビュー、2) 個人インタビュー、3) 自由記述アンケート、4) 自由記述アンケート中のインタビューの4つである。

事前に作成した9つの質問項目に沿って、1) グループインタビューと2) 個人インタビューをインタビュアー3人(A,B,C)で実施した。対象としたK県の高校でインタビューを実施できる時間の都合上、1) グループインタビューでは、2つのパーソナリティを合わせてインタビューを行う場合もグループもあった。また、インタビューにおける補足として利用するための3) 自由記述式アンケートも同時に実施し、その際にも4) 自由記述アンケート中のインタビューを実施した。3) 自由記述アンケートと4) 自由記述アンケート中のインタビューは4人(D,E,F,G)で実施した。また、これらのインタビュアーなどを実施した際に複数のインタビューなどを受けた対象者も存在する。その際には作成した質問項目に沿いながら質問内容が被らないよう考慮した。表22は各インタビューにおける人数、インタビュアー、時間の詳細である。

表 22 インタビューについての詳細

インタビュー	詳細	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
グループインタビュー	人数	4名	2名	4名	4名	5名	3名	2名
	インタビュアー	C	C	B	C	B	A	B
	時間	85分	85分	85分	85分	85分	85分	85分
個人インタビュー	人数	1名	1名	1名	1名	1名	1名	1名
	インタビュアー	A	A	A	A	A	A	A
	時間	10分	10分	10分	10分	10分	10分	10分
自由記述アンケート中のインタビュー	人数	4名	3名	2名	2名	4名	3名	3名
	インタビュアー	D,E	D,E	D,E	F,G	F,G	F,G	F,G
	時間	10分	10分	10分	10分	10分	10分	10分

2. 調査期間

パーソナリティ調査2における調査日は、2018年7月30日であった。

3. 質問項目の検討

1) インタビューにおける質問項目

パーソナリティ調査2における質問項目については学識経験者のチェックの基、Sport England の Under the Skin²⁶⁾や修正版スポーツパーソナリティ調査項目の8つの態度因子をもとにした。8つの態度因子はスポーツへの関わり方や態度を測定するための因子である。それらの因子を基にインタビュー調査の質問項目を作成することで、対象者の特性や考え方にさらなる追求・深掘りができる。それらを狙いとし、9つの質問項目を作成した。表23は作成した質問項目が8つの態度因子のどの因子に対応しているかを示す表である。

表 23 インタビューにおける質問項目

8つの態度因子	対応する質問
Perception of sport	①スポーツや運動(身体活動)と聞いてどんなイメージを持つか ②どのようなスポーツ・身体活動であれば行いたい
Fear of judgement	③身体活動をしている時、周りの目が気になるか
Self confidence	④自身の活動・行動に人間関係は重要か ⑤モチベーションが高まる瞬間(勝負事など)などはあるか
Self contentment	※⑤モチベーションが高まる瞬間(勝負事など)などはあるか ⑥心身ともに現在の自分の状態にどう感じているか
Desire to win	※⑤モチベーションが高まる瞬間(勝負事など)などはあるか
Sense of freedom	⑦何かを決断するときどのように決断するか
Family influence	⑧家族との関係性はどうか
Being productive	⑨平日頃の時間をどう使うか

※は同じ複数の態度因子を含む質問項目

2) 自由記述における質問項目

自由記述における質問項目にはインタビューにおける質問項目で作成した9つの質問項目を参照し5つの質問を作成した。表24に詳細を示す。

表 24 自由記述における質問項目

番号	質問内容
1	スポーツや運動(身体活動)と聞いてどんなイメージを持っていましたか。
2	どのようなスポーツ・運動(身体活動)であれば楽しいと思いますか。
3	自分の心(考え方・決断など)や体型などに対してどう思っていますか。
4	あなたはどんな時にやる気が出ますか。
5	あなたは勝負事や競争をすることについてどう思っています

4. データの記録方法

インタビューの様子は、インタビューの対象者の合意のもとで IC レコーダービデオカメラによって録音・録画され、逐語化した。

第2項 分析方法

1. GTA の概要

本研究は、インタビュー調査後に文字化し、その文字化されたインタビューの内容は、質問内容ごとに分類作業を行った。複数回にわたり各項目の内容を簡略化することで内容を要約し、それぞれの組織間において共通項や相違点などのキーワードの探索を試みた。

具体的なデータ分析として、先行研究においても述べた通り、SC-GTA（以下 GTA）を援用した。GTA はインタビュー調査によって得られたデータを解釈した上で概念を抽出し、その中から関係性を見出すことで最終的に理論を導き出す方法である。

GTA は、いったんデータを文脈から切り離してラベル名をつけたあとで、それらをまとめ直してカテゴリーを見出し、カテゴリー同士の関係を検討することにより、特定の領域に適応する中範囲の理論を産出しようとする方法である。GTA の分析は、3つのコーディング（オープン・コーディング、アキシシャル・コーディング、セレクトティブ・コーディング）で構成されている。²⁰GTA の分析における各コーディングについて以下で説明していく。

2. オープン・コーディング

本研究は、インタビュー調査後から逐語化されたデータに着目し、分析テーマと関連性のある箇所に着目した。本研究における分析テーマを十分理解した上で、抽出された箇所のコンテキストの解釈を試みた。特に関連性がないデータに関しては有効でないと判断し、分析の対象から除外した。データが十分に理解できたら、内容毎の切片にして切り離す。

そして、1つの切片データだけを見て、プロパティとディメンションを抽出し、それらをもとにしてラベル名を付けた。次に、似たラベルを集めてカテゴリーをつくり、カテゴリー名を付けた。具体的には、それぞれのカテゴリーに集まったラベル名やプロパティとディメンションを見ながら暫定的なカテゴリー名を付け、各切片データに戻って、そのまとめ方と名前が適切かを確認する。そしてそれらをもとに一覧表を作成した。²⁰⁾

3. アクシシャル・コーディングとセレクトティブ・コーディング

アクシシャル・コーディングとセレクトティブ・コーディングにおいて、各パーソナリティにおける各質問項目に対して1つのカテゴリー関連図を作った。カテゴリー関連図は、カテゴリーをプロパティとディメンションを使って関連づけたものである。作成された各質問項目におけるカテゴリー関連図の関係性を表すカテゴリー関連統合図も作成した。アクシシャル・コーディングとセレクトティブ・コーディングは、プロパティとディメンションを使って概念同士を関係づける点で、基本的に同じ作業である。アクシシャル・コーディングでは小さめの現象を把握し、セレクトティブ・コーディングでは大きめの現象を把握しようとする点だけが異なる。²⁰⁾

4. 対極比較

各パーソナリティにおけるラベル生成の際には生成されたラベルとの対極をなすラベルを見出した。対極比較を行うことでデータに対し、自分の解釈と常に反対の場合を想定し、解釈を進めることができ、適切なラベルの生成を行える。そのため、本研究においても対極比較を意識しながら研究を進めた。

第3節 日本¹⁾の若者へのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチの比較

日本の若者へのスポーツ・身体活動促進におけるアプローチの比較では、先行研究において明らかになった日本の若者へのスポーツ・身体活動の促進におけるアプローチである「平成30年 高等学校学習指導要領 (体育・保健体育)」¹⁴⁾、「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」³²⁾の2つのアプローチとパーソナリティ調査1、2で明らかとなったK県の高校生のパーソナリティ分類におけるスポーツ・身体活動促進のアプローチを比較した。

第1項 平成30年 高等学校学習指導要領（体育・保健体育）の比較項目

本研究の調査では全体的な内容である「体づくり運動」を比較項目とし、さらにその中でも対象者へのアプローチに直接関わる項目である「運動」の内容、「思考力、判断力、表現力等」の内容、「学びに向かう力、人間性等」の指導内容を対象とした。比較項目として抽出した項目は指導内容の原文を短く抜き出したものである。「運動」の指導内容の原文から抽出した比較項目を表25に示し、「思考力、判断力、表現力等」の指導内容の原文から抽出した比較項目を表26に示し、「学びに向かう力、人間性等」の指導内容の原文から抽出した比較項目を表27に示した。

表25 「運動」の指導内容の比較項目

「運動」の指導内容の比較項目	
指導内容の原文	抽出した項目
選択した領域の基本的な技能や動きを身に着ける	基本的な技能・動きを身に着ける
記録や技に挑戦したり、簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけるなどして試合をしたり、発表したりできるようにする	新たに技や動き及び得意技を身に着ける
身に付けた技能や動き等の出来映えを確かめたり、新たに技や動き及び得意技を身に付けたりして、記録や技に挑戦	記録や技に挑戦
記録や技に挑戦したり、簡易化されたルールの制限を次第に正規に近づけるなどして試合をしたり、発表したりできるようにする	ルールの制限を次第に正規に近づける
参加者の体力や技能の程度、年齢や性別、障害の有無等に応じてルールを工夫するなどして試合をしたり、発表したりできるようにする	試合をしたり発表したりできるようにする
身に付けた技能や動き等の出来映えを確かめたり、新たに技や動き及び得意技を身に付けたりして、記録や技に挑戦	身に付けた技能や動き等の出来映えを確かめる
運動やスポーツの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができるようにする	運動やスポーツの多様な関わり方を選択できるようにする

表26 「思考力、判断力、表現力等」の指導内容の比較項目

「思考力、判断力、表現力等」の指導内容の比較項目	
指導内容の原文	抽出した項目
課題や出来栄を伝える	課題や出来栄を伝える
合理的な動きと比較して成果や改善すべきポイントと理由を伝える	合理的な動きとの比較
動きを分析して良い点や修正点を指摘する	動きを分析して良い点や修正点を指摘する
自己の課題に応じて練習方法を選ぶ	自己の課題に応じて練習方法を選ぶ
自己や仲間の課題や練習方法を伝える	自己や仲間の課題や練習方法を伝える
課題解決のための練習の計画を立てる	課題解決のための練習の計画を立てる
課題解決の過程を踏まえて新たな課題を発見する	新たな課題を発見する
最善を尽くす(伝統的な所作)などの良い取り組みを見つけ、伝える	最善を尽くす(伝統的な所作)などの良い取り組みを見つけ、伝える
よりよいマナーや行為(所作)について自己の活動を振り返る	自己の活動を振り返る
状況に応じて役割を提案する	状況に応じて役割を提案する
合意形成の関わり方を見つけ、伝える	合意形成の関わり方を見つけ、伝える
合意形成のための調整の仕方を見つける	合意形成のための調整の仕方を見つける

表 27 「学ぶに向かう力、人間性等」の指導内容の比較項目

「学ぶに向かう力、人間性等」の指導内容の比較項目	
指導内容の原文	抽出した項目
主体的に取り組もうとする	主体的に取り組もうとする
勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとする	勝敗などを冷静に受け止める
相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする	相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとする
良い演技を讃えようとする	良い演技を讃えようとする
互いに助け合い高めあおうとする	互いに助け合い高めあおうとする
自己の責任を果たそうとする	自己の責任を果たそうとする
合意形成に貢献しようとする	合意形成に貢献しようとする

第2項 運動部活動の在り方に関する総合的なガイドラインの比較項目

本研究の調査では対象者へのアプローチに直接関わる項目である「合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組」、「適切な休養日等の設定」、「生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備」比較項目の対象とした。比較項目として抽出した項目は取組内容の原文を短く抜き出したものである。「合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組」の取組内容の原文から抽出した比較項目を表 28 に示し、「適切な休養日等の設定」の取組内容の原文から抽出した比較項目を表 29 に示し、「生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備等」の取組内容の原文から抽出した比較項目を表 30 に示した。

表 28 合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容の比較項目

合理的でかつ効率的・効果的な活動の推進のための取組の内容の比較項目	
取組内容の原文	抽出した項目
生徒の体力向上	生徒の体力向上
生涯を通じてスポーツに親しむ基礎を培う、生徒とコミュニケーションを十分に図る	生徒とコミュニケーションを十分に図る
生徒がバーンアウトすることなく、技能や記録の向上等それぞれの目標を達成できるようにする	技能や記録の向上等それぞれの目標を達成できるようにする
競技種目の特性等を踏まえた科学的トレーニングの積極的な導入	競技種目の特性等を踏まえた科学的トレーニングの積極的な導入
短時間で効果が得られる指導を行う	短時間で効果が得られる指導を行う

表 29 適切な休養日等の設定の内容の比較項目

適切な休養日等の設定の内容の比較項目	
取組内容の原文	抽出した項目
1日の活動時間は平日2時間程度、休業日は3時間程度	1日の活動時間は平日2時間程度
できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う	できるだけ短時間に、合理的でかつ効率的・効果的な活動を行う

表 30 生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備の内容の比較項目

生徒のニーズを踏まえたスポーツ環境の整備の内容の比較項目	
取組内容の原文	抽出した項目
生徒の多様なニーズ活動を行うことができる運動部を設置する。 ・競技力の向上 ・友達と楽しめる ・適度な頻度で行える	競技力の向上
生徒の多様なニーズ活動を行うことができる運動部を設置する。 ・競技力の向上 ・友達と楽しめる ・適度な頻度で行える	友達と楽しめる
生徒の多様なニーズ活動を行うことができる運動部を設置する。 ・競技力の向上 ・友達と楽しめる ・適度な頻度で行える	適度な頻度で
多くの生徒の運動機会の創出が具体的な例 ・季節ごとに異なるスポーツを行う活動 ・競技志向でなくレクリエーション志向で行う活動 ・体力づくりを目的とした活動 ・生徒が楽しく体を動かす習慣の形成に向けた動機付け	季節ごとに異なるスポーツを行う活動
多くの生徒の運動機会の創出が具体的な例 ・季節ごとに異なるスポーツを行う活動 ・競技志向でなくレクリエーション志向で行う活動 ・体力づくりを目的とした活動 ・生徒が楽しく体を動かす習慣の形成に向けた動機付け	レクリエーション志向で行う活動
多くの生徒の運動機会の創出が具体的な例 ・季節ごとに異なるスポーツを行う活動 ・競技志向でなくレクリエーション志向で行う活動 ・体力づくりを目的とした活動 ・生徒が楽しく体を動かす習慣の形成に向けた動機付け	体力づくりを目的とした活動

第3項 比較方法

上記の指導要領・ガイドラインの各項目において、対象者に対するアプローチと関係のある項目または文章を抜粋し、それらのニュアンスも考慮しながら学識経験者の議論の基に比較をし、それぞれ表に示した。比較内容は「○（本研究のアプローチ方法と合致している）」、「△（本研究のアプローチ方法と条件によって合致する、合致しないに分岐する）」、「×（本研究のアプローチ方法と合致しない）」、「－（本研究のアプローチ方法と比較できるものが存在しない）」で比較し、○の数が多いパーソナリティをその指導要領・ガイドラインの項目に適しているパーソナリティとし、×の数が多いパーソナリティを適さないパーソナリティとした。また、表の各パーソナリティにおける（）内にそれぞれ比較内容の根拠を示す各パーソナリティのアプローチを記載した。

第4節 倫理的配慮

本研究は順天堂大学スポーツ健康科学研究科研究用倫理審査会により承認を得たものである（順大院ス倫第 30-76 号）。

本調査を実施するにあたり、回答者を数値化・暗号化し管理することで研究者に個人名が特定できないように処理することや、回答内容が外部に漏れることがないように、個人情報の管理を徹底することを説明した。